



MAGNOLIA CAFE ANNUAL REPORT 2023

2023年度 マグノリア・カフェ
年間レポート「MARE」 第3集

MAGNOLIA CAFE ANNUAL REPORT 2023

2023 年度 マグノリア・カフェ

年間レポート「MARE」 第3集

四国学院大学

まえがき

マグノリア・カフェ運営委員長
ネルソン橋本 ジョシュア諒

2023 年度のマグノリア・カフェの活動をまとめたレポート「MARE」第 3 集を皆さんのところに無事お届けでき、嬉しい限りである。

四国学院大学が提供するユニークな課外活動であるマグノリア・カフェは、2023 年度も様々な取り組みを展開してきた。新たなマグノリア・カフェも加わり、合計 11 のマグノリア・カフェが開催され、多くの成果を残した。本レポートには、各マグノリア・カフェのオリジナリティ溢れる活動報告が記録されている。

今年度の 5 月には、長いパンデミック状態を経て、新型コロナが 5 類感染症に移行した。それに伴い、各マグノリア・カフェの活動がより活発に、より自由に開催することができた。教員と学生が協力して築き上げてきた〈学びの場〉は実に興味深い。本レポートを通して、読者の皆さんがその魅力に少しでも触れることができればと願っている。

各マグノリア・カフェの報告と付録にも詳しく記載されているが、昨年 10 月 14 日の大学祭には、ゲームや映画上映会などを行い、各マグノリア・カフェが様々な形で参加した。また 2 月に開かれた「マグノリア・カフェ フォーラム」では、展示や発表を通して年間活動の報告会が実施された。

マグノリア・カフェらしい〈学びの輪〉がこれからも広がっていき、来年度に向けて〈知〉の交流がさらに充実していくことを期待している。今年度のマグノリア・カフェに関わったすべての人に、また本レポートの作成に携わった一人ひとりに感謝を申し上げたい。マグノリア・カフェの活動に興味ある方は是非一度お問い合わせを！

* マグノリア・カフェの年間レポートの英語表記「Magnolia-cafe Annual Report」のマグノリアの最初の 2 文字と続く頭文字から成る本冊子の名称「MARE」。MARE [マーレ] はイタリア語で「海」を意味する。「海」は、本キャンパスにとって馴染み深い、穏やかな瀬戸内海のイメージである。

目次

ポストモダン教職カフェ	1
踊ろうぜ	6
珈琲・ホビ・ーハウス 第3章 ～思想形態と脱構築～	11
The Strength of Weak Ties 5.0	15
空海カフェ	19
日韓文化コラボ	23
“不快適”な学寮の可能性を追う	27
Yongaku Well-being Network 2023	31
科学の芽（目）を育ててみる会	35
自分と隣人の命をまもる	39
インプロを生きる。	43
付録① マグノリア・カフェ ストール（大学祭）& フォーラム（報告会）	47
付録② マグノリア・カフェに関する規程〈一部抜粋〉	50

ポストモダン教職カフェ

担当教員：森川 由美

活動の理念と3つの問い

20世紀末からのICT・AI化、DX化による人間の生活変化に即し、近代学校教育からポストモダン学校教育への転換をはかる学習指導要領が2020年度から日本の学校に導入された。さらに、中央教育審議会は「令和の日本型学校教育」の内容に関する答申（2021年1月）、「令和の日本型学校教育」を担う教師に関する答申（2022年12月）を出した。両答申が謳う学校や教師は、児童生徒の「個別最適な学びと協働的な学び」が実現される場所であり、「主体的な学びを支援する伴走者」である。その一方で、2022年9月には国連が日本政府に対し、障害を持つ子どもを分離した特別支援教育を中止し、普通学級への就学を求める勧告を出している。すなわち、インクルーシブな学びが可能な学校を創っていくことが、日本政府からも国連からも要請され、その実現が模索されている。

教員志望の学生が教職についている際、こうしたインクルーシブな学びの実践に直面することになる。しかし、学校教員を志望する学生は、本学で学ぶ教職課程の授業では、授業という時間的・空間的な制限により、学校教育現場に関わる人とこうした実践に関する対話や試行錯誤の活動や振り返りという経験が十分できなのが現状である。

そこで、本カフェでは「インクルーシブな学び」に焦点をあて、以下の3点を「問い」として設定した。

(1) ポストモダン社会におけるインクルーシブな学びが可能な学校とはどんな学校なのか。(2) インクルーシブな学びが可能な学校では、児童・生徒の学びはどんな形にしていくのか。またその際、教員と児童・生徒との関係性はどのように変わるのか（同時に、これまでと変わらない関係性は何か）。(3) インクルー

シブな学びが可能な学校は、ポストモダン社会においてなぜ必要なのか。

活動の報告

「3つの問い」について考えるため、2023年度は大別すると、映画・録画番組の視聴から考える、ワークショップで現職の教育関係者と学ぶ、卒業生の現職教員からお話をうかがう、教育実習から考えるという4種類の活動を行った。以下、4種類の活動の報告を行ったあと、これらの活動を通して各学生がみえてきた「3つの問いに対する私たちの考え」を掲載する。



722教室にてTV番組録画鑑賞（5月22日）

映画・録画番組の視聴から考える

今年度の活動では、映画3本と番組録画3本を観た。映画は、大学祭で上映した「夢見る小学校」（10月14日）、高松市の映画館ソレイユへ観に行った「夢見る校長先生」（8月28日）、マグノリア寮スタディールームで鑑賞した「 temple・グランディン〜自閉症とともに〜」（1月24日）である。番組録画は、NHK ETV特集「僕らが自分らしくいられる理由-54色の色鉛筆-奈良のインクルーシブ中学校」（5月22日・6月2日）、NHKハートネットTV「“インクルーシブ教育”を考える（2）多様な子どもたちと共に学ぶ」（6月16日）、TV

上映版「みんなの学校」(11月17日)を7号館教室やマグノリア寮スタディールームで鑑賞した。

「僕らが自分らしくいられる理由-54色の色鉛筆-奈良のインクルーシブ中学校」を見て、学校現場には発達障害や家庭環境に悩む子どもなどの様々な子どもがいることを再確認することができた。また、映像の中で子どもたちが自分の悩みを打ち明け合う場面があり、家庭での悩みを打ち明ける子どももいた。全ての子どもが悩みを打ち明けることができる学級・学校を作ることがインクルーシブ教育につながっていると感じた。(文学部3年・小川峻太)

映画「 temple・グランディン」の時代は、現代のように障がいに対して向き合っていない時代であったが、生徒の特性を生かすための授業をした高校の恩師と自分の特性を活用し周りを認めさせた temple はすごいと感じた。映画鑑賞後に行った食事会では、学生が主体となって食事を作りおいしいカレーを作ることができたが、作りすぎて余ってしまうハプニングもあり、とても面白かった。食事中に映画の感想を言い合い、映画をどのような視点で見ているのかも知ることができとても有意義な時間だった。

(文学部2年・江口裕汰)



大学祭での映画上映(10月14日)

大学祭(10月14日)では、「今求められる学校の在

り方とは」と題して映画「夢見る小学校」を上映した。前日に本カフェメンバーで試写を行い、私立きのくに子どもの村学園、長野県伊那市立伊奈小学校、東京都世田谷区立桜丘中学校の実践から、これからの学校のありかたを考えた。大学祭当日は、午前と午後の2回上映し、鑑賞者人数は合計64名で本学生42人、学外22人(本カフェメンバー除く)だった。

「夢みる小学校」の上映会では、「きのくに子どもの村学園」での子どもたちの生活を見ていく中で、これからの学校のミライの姿を考えることが出来たと思います。自分たちで考え、楽しく活動する小学生の姿に感動しました。上映会には多くの方が参加して下さい、教育関係者をはじめ一般の方からも「とても良かった」「他の作品も見たい」との声を頂き上映会開催の意義も感じました。

(文学部4年・石原大樹)

本映画に出てきた「きのくに子どもの村学園」は、学校に行ってるように感じない学校であった。こんな学校に通うことができたなら学校に行くことの楽しさを知ることができたと思った。また、文科省の掲げる主体的・対話的・深い学びを実践できている学校であり、全学校が目指すべき像のようにも思えた。しかし、公立学校で本校のような学校を目指すのは現実的ではないように感じた。(文学部3年・木元大翔)

大学祭で「夢見る小学校」を見たところ、子どもたちの心の底から出ているであろう笑顔が大きく印象に残った。「教育」とは何のためにあるのか、もう一度深く考えさせられた。そのスピンオフ作品、「夢見る校長先生」では、個性豊かな各地の校長先生の熱い想いを聞いて、自分にとって大きな刺激となった。

(文学部3年・野口拓海)

ワークショップで現職の教育関係者と学ぶ

映画「みんなの学校」の舞台となった大阪市立大空小学校初代校長の木村泰子さん、大空小学校元教諭の塚根洋子さんを講師に迎え、教育関係者（学校教員、スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラーなど）が集まるみんなのCaféの人たちと2日間のワークショップ（チャーリーワークショップ）を行った。1日目夜には懇親会が開かれ、講師や現職の教育関係者と懇談した。



チャーリーワークショップ（9月17・18日）



チャーリーワークショップ・夜の部（9月17日）

現職の先生方の実体験を聞かせてもらい、インクルーシブな学校の事例を学べた良い機会だった。実際に教員になった時に少しでも自分自身が実践していけたら良いなと感じた。2日目は実際に不登校になってしまった高校生の話を聞くことができ、自分が今まで持っていた学校のイメージに変化が生じた。学校というものが生徒にとって居づらいものになっ

てしまう例を聞け、そのような子供をできるだけ減らしたい。2日間のワークショップで様々な意見や考え方に触れることができた。（文学部4年・濱渦憲伸）

1日目・夜の部の懇親会では、食事後に塚根洋子さんを囲んで現代の子どものSNSの使い方について参加者と議論を交わした。現在学校側はSNSの使い方に難儀していると塚根さんたちはおっしゃっていた。学校の子供にも焦点が当てられていたが、大人もSNSの使い方や情報リテラシーは身に付けておく必要があると実感した。（文学部3年・木元大翔）

2日目のワークショップでは、学校現場で想定される場面を示され、実際にどんな対応が望ましいか教員の立場になって考えるとといった取り組みがあり、状況を想像しやすいことでより理解が深まった。また、この取り組みでは、今まで当たり前と思っていたことが覆され、新鮮だった。（文学部3年・坂東拓海）

卒業生の現職教員からお話をうかがう

高松市立中学校の社会科教員である湊翔太さん（2019年3月卒業）を招き、「インクルーシブ教育とこれまでの実践」と題して、教員生活についてお話をうかがった。お話の内容は、学生時代に行った不登校生徒に対するボランティア活動、授業づくりや実際の授業実践、生徒と向き合い方など多岐にわたった。

お話を伺い、教員の像を異なる視点から見ることができた。ICTを導入した授業は、教員たち全員がICTが得意という訳ではないので、他教員と協力し、授業改善に取り組む必要があると分かった。他教員と連携して仕事を行うことも教員のスキルを重ねることであると気付かされた。なかでも、生徒に先生が「私は〇〇さんのような生徒を過去に受け持っていたよ」



卒業生からうかがう教員の仕事の実際（8月23日）

という発言に対し、個人は個人であり、比べる必要はないというお話は強く印象に残った。自分も言ってしまうかもしれない言葉なため、凄く参考になった。

（文学部2年・加藤唯）

教職実習から考える

中学校で教育実習を終えたばかりの本カフェメンバーの4年生の石原大樹さんと濱渦憲伸さんから6月16日と23日に教育実習のお話をうかがい、これまでに本カフェでみた動画と関連づけて中学校におけるインクルーシブな学びについて考えた。中学校での教育実習は4年次に1回だが、小学校での教育実習は2回（3年次と4年次）行われる。そこで、11月17日は小学校教員を目指す4年生の河田和樹さんから2回の教育実習についてお話してもらった。河田さんの教育実習先の小学校は車椅子ユーザーの吉崎晴さん（社会福祉学部3年）の母校であり、吉崎さんの当時の担任が現在同校の校長先生でもあることから、吉崎さんにも参加してもらい、インクルーシブな学校のあり方を考えた。

先輩方の教育実習報告を聞いて、時代による学校の変化や子どもたちの変化を感じた。その変化の中で教員がどのように関わっていくかを実際に聞いたり考えたりすることができて勉強になった。大学で学んでいるものだけではまだ足りないことも分かっ

た。自分の実習の際に子どもたちとの関わり方や授業に活かしたい。（文学部3年・岩田花苗）

3つの問に対する私たちの考え

インクルーシブな学びが可能な学校は、すべての生徒が同じ環境で勉強できる学校であると考えます。発達障害の子どもは通常学級だけでなく、特別支援学級でも勉強をしている、つまり2つの学びの場に存在していることになる。真のインクルーシブ教育を行うためには、本人が望む場合は通常学級だけで発達障害の子どもが勉強できるように、学校側が細かな支援・指導を行い、障害のある子がいることを前提とした教育にアップデートしていく必要がある。

（文学部4年・石原大樹）

インクルーシブ教育が可能な学校とは、児童・生徒の個性を尊重し、特別な支援を必要とする者とそうでない者がともに学び社会に出るための能力を高め合える学校だと考える。その学校では、それぞれの生徒の特性に合わせて全体的な教育の中でも児童生徒の個別最適な学びや協働的な学びが実現できる形が望ましい。その際には学びの主体を生徒にすることを心がけ、教師は子どもの力を伸ばす支援をする存在として位置づけられると考える。

（文学部4年・濱渦憲伸）



動画鑑賞会＋教育実習報告会（11月17日）

インクルーシブな学びが可能な学校とは、生徒のやりたいことを応援することを、生徒間、生徒と教師間で取り組んでいる学校であると考え。全ての学校がこのような学校になることは難しいが、教師主導の学校をあくまで教師は生徒の学びをサポートする方向にもっていくことはできると考える。学校教師が主導するままでは、インクルーシブな学びの達成は不可能だと考える。現時点ではこれが着地点であるが、残りの一年をかけ最終結論は卒論で出した。

(文学部3年・木元大翔)

インクルーシブな学びが可能な学校とは、「学習」が個別化された学校であると考え。生徒の個性に合わせて、学習の内容とスピードが存在するというのが理想だ。また、そこでは教師は今まで以上に生徒の理解者兼応援者であるべきだ。もちろん、教師が生徒に物事を教えるという大まかな関係性は変わらない。生徒には、圧倒的な「個性」が存在するので、その方が合理的であると自分は考える。

(文学部3年・野口拓海)

インクルーシブな学びが可能な学校では、生徒らの学びの形は一つではなく、集団のメンバーの特性に合わせて各自ができることを協力しあい、柔軟に形成していくことが必要である。これに伴って教員と生徒の関係は生徒のこの学びをサポートできるよう支援できるようにし、上から引っ張る関係性からは脱却していくことが求められる。

(文学部3年・坂東拓海)

インクルーシブな学校では、すべての児童生徒が意見を出すことができ、協働して物事の解決するために学ぶという形になると考えた。インクルーシブとは「みんな一緒に」という意味があり、その理念を

実現するにはそれまで仲間外れにされていた児童生徒や教師を含めた全員が参加できる学びの形に変化させていくことが必要と考える。

(文学部2年・江口裕汰)

インクルーシブな学びが可能な学校とは、人間の多様性が尊重された自由な社会に参加することを目的とした授業が行える学校だと考える。本人の希望を聞かずに障がいの種類によって学び場を分けること自体が差別に繋がる。生徒に既存の教育と支援をただ行うだけでなく、環境を整え、新しい教育を行う。児童の可能性を信じ、一人一人の適応した学びを提供する。教員と児童・生徒との関係はともに成長できる関係が望ましいと考える。

(文学部2年・加藤唯)

学校において、教員と児童生徒は主従関係に近い関係だったと実体験から感じていた。活動を通し、前述されているように教師は子どもたちの伴走者であることを忘れてはならないと思った。児童生徒一人一人に即した学びの場を教員は考えることが必要不可欠である。そのためには、児童生徒のみならず教員自身も多様な意見に耳を傾ける、学び続けることが必要だと考える。

(文学部2年・高田樹希)



ワークショップ振り返り・大学祭打合せ (9月27日)

踊ろうぜ

担当教員：阪本 麻郁

活動の理念

SNS の普及によりバーチャルなコミュニケーションが日常化した現代社会は、他者と関わる手段はよりオンライン化され、空間における身体性は日々希薄化している。その速度は、2019 年末から流行した COVID-19 の流行により加速度を増したと言えるのではないだろうか。感染対策という名の元、不要不急の外出は控え、オンライン授業やオンライン会議が日常的に行われ、飲み会をオンラインで行うオンライン飲み会までもが生み出された。2024 年 1 月現在、COVID-19 はインフルエンザと同じ 5 類感染症へと移行したが、多感な青年期をオンライン授業やソーシャル・ディスタンスと共に生きてきた学生たちに与えた影響は何だったのだろうか。

オンライン化された生活は身体性がより排除され、マスクが日常化したコミュニケーションは表情や感情を読む事が出来ず社会生活におけるコミュニケーションを円滑に進める障害になったと考える。

また、身体性と時間と空間の共有もそれらに相まって以前より増して希薄化しているのではないだろうか。そこでマグノリア・カフェ『踊ろうぜ』では、身体性と時間と空間による芸術「ダンス」を軸に学生が主体となり細分化したテーマに取り組み、リサーチやパフォーマンスを通して身体性と空間の共有における再起を図る。今年度のコンテンツとしては、以下の通りである。

1. 授業の枠を超え、より「ダンス」に取り組むたい学生にその機会を与える。

2. 学生主体のプロジェクトを進める事で、より学生から主体性を導き出す。
3. 作品作りのプロセスやグループ内でのフィードバックを重ね、経験値を上げる。
4. ダンスに限らず、ダンスを取り巻く環境にも目を向け、他分野とダンスの関わりについて関心を広げる。

活動の報告

■ 『Friday Dance Evening』

社会学部 3 年・土田倭也が企画し、自らテーマを選択し、秋学期毎週金曜日の夜に大学内で即興のパフォーマンスを行なった。そして、パフォーマンス終了後には観に来てくれた学生たちと各々の視点や考察を共有する時間を設け、土田の身体と表現、観客の見方や考え方にどのような変化が起きるかを探る実験的プログラムを行なった。そして毎回「土田の戯言」と題した振り返りを記録した。また、社会学部 2 年・桂波那が広報・運営など制作面を担った。

□第 1 回『裸で踊る』

日時：2023 年 9 月 15 日

場所：ダンススタジオ

土田の戯言：とても刺激的だった。裸で踊ることに最初は抵抗があったが、踊っている内に段々と解放感を感じた。解放感と同時に思考が停止し、動物的な感覚が生まれてきた。セックスをしている時のような

感覚かもしれない。本能で動いている感覚で、とても心地良かった



□第2回『食べている所を観られる vol.1』

日時：2023年9月22日

場所：ダンススタジオ

土田の戯言：かなり混乱した。食べるという行為は、普段無意識に行なっているからだろうか。その無意識に行なっている行為を注視されたからかもしれない。また、口から食べ物を出してみたり、出したものを食べてみたり、少し吐きそうにもなった。観客からも嗚咽が聞こえ、なぜか申し訳なく感じた。と同時に観客のリアクションが面白く感じられ、次回はもっと開けた場所で試みたくなった。



□第3回『食べている所を観られる vol.2』

日時：2023年9月29日

場所：カフェテリア・コイノス

土田の戯言：自分の中にある規律や社会性から自分を完全に切り離す事は難しいのかもしれない。いかに行儀の悪い行為をしてみても、途中で理性が働き周りの目を気にしてしまう。最後に大声でその場に居る人たちに「さくらんぼ、種があるので気をつけて!」という言葉が発したのも、迷惑をかけてごめんなさいという意味だったように思う。また、パフォーマンス後の観客との対話で社会性と哀愁、育った環境、非人間的とは、三重構造(パフォーマー・望んで来た観客・偶然そこに遭遇した人)など今後リサーチするヒントを沢山得ることができた。



□第4回『身体性と音、音楽との関係』

日時：2023年10月13日

場所：ノトスタジオ

土田の戯言：やりたいことを詰め込みすぎた。今回社会学部3年武内愛実が音響を担当。何故か彼女と共通認識を生み出せなかった。自身の中でも、踊ってい

て混沌としていた。

私は頭に浮かんだこと、感じたことを衝動的に体現化する傾向がある。何故やどの様により、その場その時に感じた事を体現化する事に重きをおいてきた。

しかし誰かと共同作業をする場合、共同作業をする相手との共通認識の構築は不可欠で、それが十分でないと相手を傷つける、共に何かを生み出せないということに今回気づき、反省した。と同時に、今までのパフォーマンスはあくまでも私自身のリサーチの為にこなしていたに過ぎないという事にも気づかされた。実験的なパフォーマンスとはいえ、共同作業する相手や観客について更なる理解を深めていきたい。



□第5回『どうすれば身体感覚を変化することができるか』

日時：2023年10月27日

場所：ノトスタジオ

土田の戯言：ユーゴスラビア出身のパフォーマンスアーティスト、マリーナ・アブラモヴィッチ（注1）の「リズム 0」（注2）を模倣し、自身の身体に何が起るかを実験した。初めは悲しみや怒り、恐怖を感じた。蜂蜜をかけられたり、カッターで服を切られたりし、とにかく不安だったし、心が痛かった。ビール

をかけられた瞬間、その不安や心の痛みが何故か諦めへと変化すると同時に頭の中に渦巻いていたネガティブな感情や思考がストップした。初めての感覚で興味深かった。また、楽しそうに私の身体にアクションする人や、罪悪感でただ傍観する人、居た堪れなくて外に出る人、観客にもいろんな居方がありとても興味を惹かれた。

パフォーマンス後の観客との対話では、いじめについて、罪悪感、人間の凶暴性についてなど社会的な問題について触れたことも興味深かった。今回のパフォーマンスは、観ている人に大きなインパクトを与えたのだと感じた。

また「痛み」は、身体感覚を変容させる一番の要因なのかもしれないとも考えた。



□第6回『動きの繰り返しと距離の関係』

日時：2023年11月3日

場所：ダンススタジオ

土田の戯言：今回友人2人に協力を仰ぎ、パフォーマンスを試みた。10分間同じ動きを繰り返した。シンプルな動きを10分間繰り返すと、動きが動きでなくなっていく感覚を覚えた。意識的が無意識へと変化し、動きに対する刺激が減少した。また、観客も退屈にさせてしまった。

途中3人の立ち位置を変え、再び10分間同じ動きを繰り返したのだが、立ち位置が変わることで空気が変わって、新しい新鮮さが生まれた。だが暫くするとその新鮮さも消えていった。

このパフォーマンスは、空気感を変えるために必要なことは何かということを考える良いきっかけとなった。



をきくことが出来た。ダンスをより大きな枠組みとして捉え、食事会という名の下、身体性と共に時間と空間を共有することを楽しみつつ、今後の活動にも生かせる実りある機会となった。



舞台衣装の小松陽佳留先生と



舞台音響の高橋克司先生と

■ダンスを取り巻く環境と食事会

よりダンスに取り組みたい学生たちとダンスを取り巻く環境で活躍されている多分野のエキスパートたちとの食事会を設けた。授業では話せない現場での体験談やダンスとの関わり方など多岐に渡った話



文化社会学が専門の福永健一先生と

注

1. セルビア系アメリカ人の現代美術家、慈善家、アート映像作家。パフォーマンス・アーティストとして世界的に知られており、アーティストと鑑賞者の関係性を試したり、自身の肉体を駆使して限界に挑戦したりと実験的で過激なパフォーマンスを通じて、政治的・社会的なメッセージを表現する。
2. 1973年から1974年にかけて発表された『リズムシリーズ』と呼ばれるアブラモヴィッチの初期の作品群のひとつであり、世界でももっとも知られることになったパフォーマンス。あらかじめ用意した複数のアイテムを観客に提示し、6時間の間、自分に何をしてもいいと宣言し、その結果がどうなるかというパフォーマンス。アイテムの中には拳銃やナイフなど、身体や生命に影響を及ぼすアイテムも含まれていた。

珈琲・ホビー・ハウス 第3章 ～思想形態と脱構築～

担当教員：山中 雅大

「真面目に不真面目（遊び・娯楽）」を追究する活動

人間という動物の学名は「ホモ・サピエンス（知恵のヒト）」だとされている。しかし、果たして学名通り、ヒトという動物は賢いのだろうか。私たちの社会を振り返っても、繰り返される戦争、払拭されない汚職事件、無くならない犯罪の数々……と、枚挙に暇がない「失敗」や「知恵の乏しさ」がヒトの所業として日々伺える。あるいは、学生自身も、つい休みがちな講義、未提出のレポート、落単危機を感じず同じことを繰り返す「向上心」の希薄さ……など、身に覚えのある『繰り返した』過ちの1つや2つぐらいあるのではないだろうか。筆者自身振り返ってみても、「恥の多い生涯を送って来ました」と言わざるを得ない学習の無さで、35年間生きてきたと胸を張れる。

オランダの歴史研究家であるヨハン・ホイジンガは人間を「ホモ・ルーデンス（遊びのヒト）」と捉え、あらゆる文化の根底には「遊び」があると考えた。つまり、ヒトは「知恵」があるゆえに文化や文明、社会を形成したのではなく、「楽しみ」「遊ぶ」ことで文化を生成したと考え、「遊び」は無益や無意味なものではないことを説いた。

また、大学生や若者の「娯楽」は怠惰や無益として捉えられがちだが、「遊び」同様に有益として捉える向きもかつてはあった。「娯楽」を意味する「レジャー（leisure）」はラテン語の「リセーレ（licère）」に由来し、「自由であること」を意味した。つまり、「仕事に従属しない独立したもの」として考えられていた。「リセーレ」に対応する言葉として、ギリシャ語の「スコレー（σχολή）」があるが、「スコレー」は後に「スクール（school）」になった。つまり、「娯楽」や「趣味」は「人間の本质」として捉えられ、仕事とは関係のない純粹

な好奇心で学んだり、考えたりすることだと位置づけられていた。しかし、近代以降、現代社会では「仕事」や「労働」観の社会的背景により、「娯楽」や「趣味」は、仕事や学業、あるいは実用的で有用性の高い「教養」や「技能」として捉えられるか、「社会にとって役に立たない」生産性の低い「娯楽」として二極分化しているかのように捉えられ、「自由な知的追究」としての「レジャー」が不自由で限定的なものになっている。

本カフェは、このような背景から主宰教員ではなく、学生の純然たる「遊び」や「娯楽」への興味関心について「自由な知的追究」を根幹に据え、3年目となる2023年度も学生が主体的かつ積極的に実施・運営することを目的とした。（山中雅大）

「珈琲・ホビー・ハウス」のカフェ名の由来と精神

本カフェは「珈琲・ホビー・ハウス」というカフェ名で活動している。名前に珈琲という嗜好品を冠しているがゆえか、「珈琲やお茶を飲んで、和気あいあいと談笑しているんですか？」「ほんわかと趣味や娯楽について、喫茶店とかで『推し活』し合っているのですか？」と思われがちである。しかし、全くもってそのような「楽しいだけの活動」は実施していない。騒然たる甲論乙駁、あるいは怒号が飛ぶ批判の嵐のような活動を展開している。というのも、「珈琲・ホビー・ハウス」の由来は17世紀半ばから1世紀余りに渡り欧州で繁栄した「コーヒー・ハウス」を模しているからである。

「コーヒー・ハウス」は、新聞が読める空間や展示会場の役割、あるいは読み書き能力が不十分な人々にも口頭でニュースを伝えたり、客同士が激しい政治談

議を毎日のように重ね合ったりする公共空間であった。また、文芸的な作品への批判や政治的批判の拠点となっていた。ゆえに、「コーヒー・ハウス」は単なる喫茶店や新聞閲覧所以上に、近代ジャーナリズムが形作られる重要な場所となっていた。施設の特徴として、社会的地位の平等を前提とし、その差を埋める行動様式が求められたり、社会の固定観念や制度を問題として捉えたり、情報や文化の共有（から商品化に転化）を成す場を有していたりした。本カフェは、この「コーヒー・ハウス」のように立場や環境、主義や思想、「推し」や愛好ジャンルが異なる者同士の集まりで発生する、喧喧囂囂、侃侃諤諤な議論や活動となるように、「建設的な批判」を実践する公共的空間の展開を企図し発足した。2023年度は「思想形態（イデオロギー・固定観念）」と「脱構築（二項対立的思想構造を批判し、外へ開かれた立場を模索すること）」をテーマに多くの活動を行った。2023年度は、前々年度、前年度以上に主宰教員の関与度を下げた。それに伴い、学生たちの主体性や積極性による実施・運営度合いが上がり、良くも悪くも彼ら彼女らにとって「成長の機会」としての貴重な経験になった。2023年度の活動実態や評価については、以下からの学生による報告を参照されたい。

(山中雅大)

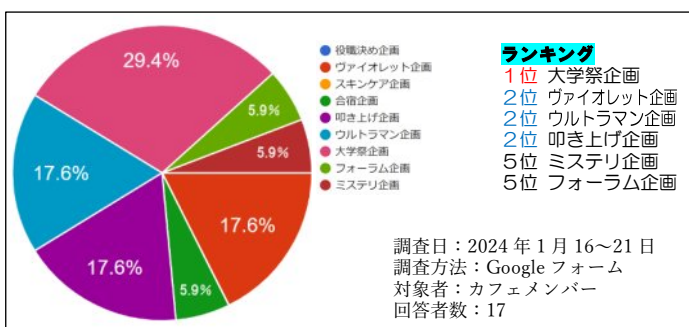


図1 2023年度の活動で一番印象に残った企画

2023年度の活動報告の概要

本レポートを執筆するにあたり、本カフェに所属する学生を対象にアンケートを実施した。アンケート内容は「2023年度の活動で一番印象に残った企画」

(図1)である。2023年度の「珈琲・ホビー・ハウス」では、16企画を31回に分けて実施した(2024年2月上旬時点、予定企画省く)。今回はその中でも特に人気だった「大学祭企画」、「叩き上げ企画」の活動をピックアップして報告する。(村上千宥理)

3度目の挑戦!!! 一致団結の「大学祭企画」

「大学祭企画」は、大学祭で何を出店するのかを企画として検討し、カフェメンバーから意見の聴取を行い、コンセプトやシフト管理を含め、運営するための企画である。大学祭当日のためのシミュレーションや打ち合わせ、前々夜祭、前日準備、本祭と合計4回の活動を実施した。アンケートでは、「協力したことで団結力が上がったから」、「昨年度より多くのお客様に恵まれたから」という好意的な理由が多くあった。学祭当日は、メンバー一人一人が自分にできることを見つけ行動する姿が見られた(純利益が数万円になるほどの大成功!)。(村上千宥理)



10/13 大学祭企画②～前日準備～

ブラッシュアップ・カフェライフのための叩き上げ

「叩き上げ企画」は、企画を立案・実施する予定の企画を事前に提出し、カフェメンバーが審議する企画である。アンケートでは、「企画を正式に提出する前にメンバーから意見をもらったことでより良い企画にすることができた」、「多様な視点から意見をもらうことで自分では気づかない部分にも気づくことができた」という理由があった。この企画を実施した

ことで、個々人の企画力、計画性の向上がみられ、より良い企画の立案・実施に繋がった。(小川優太)

叩き上げ企画を通して

私は本カフェの「叩き上げ企画」において「釣り企画」を提案した。この企画は、私を含め3人での共同企画だった。魚釣りを通して、食に対する考えや、魚が釣れるまでの忍耐力を身に付けることを目的とした。「叩き上げ企画」では、様々な視点での質疑を頂いた事で、企画者では見つけられなかった問題点や企画立案時では不透明だった部分、そして深掘りすると矛盾する点などを見つけれ、非常に有益な時間になった。また、複数人で立てた企画のため、役割分担(負担の分散)や、最終的な目的、企画途中の日程など、人によって考えが異なるため、擦り合わせる必要があったのは苦労した点であった。

「叩き上げ企画」を通して事前の打ち合わせや企画書の精査、改善点を次回にどう生かすかを身につける良い機会となった。(依光駿人)



8/28 叩き上げ企画

2023年度の「珈琲・ホビー・ハウス」活動総括

「珈琲・ホビー・ハウス」ではメンバーの「ホビー(趣味)」や興味関心のあるものを持ち寄って楽しむだけでなく、カフェ運営のための分業体制、学問的要素を取り入れた企画立案から実施、そしてジャーナルを書くまでを行っている。そうすることで、自分自身や他者の興味関心について学問的に「楽しむ」のももちろん、学生自身の主体性や計画性を高めることができた。また、卒業論文やレポートの書き方の向上

や就職にも役立たせることができた。(小川優太)

本カフェの活動に参加した4年生(卒業生)の評価

「実に面白い」カフェ活動

私は本カフェの活動を通じて、学問的視座を用いながら様々な娯楽を享受する面白さを知ることができた。また、趣味嗜好が異なるメンバーが集い、自由に議論を行うことで、自分の中で知らず知らずのうちに構築されていた思想形態や価値観を疑う機会となった。さらに、大学祭やフォーラム制作では、自ら娯楽の場を創造するという取り組みを通して、集団活動の難しさを身に沁みて実感したが、その分共同体としての結束がより強くなったのではないかと考える。(島健太)

時をかけたカフェ ～ 変わらない場所 ～

本カフェは自分たちの興味・関心を追及するカフェであり、様々な企画を幅広く行っている。映画の視聴や大学祭での展示・屋台の出店、アスレチックなど屋内外を問わない活動をしている。しかし、その活動のユニークさは初期の「珈琲・ホビー・ハウス」から1mmも変わらない。このユニークさが「珈琲・ホビー・ハウス」の良さであると私は確信している。一方、今後の課題として、一部のメンバーだけが積極的に企画を立てることによる趣味の偏りがある。改善策に、お互いの思考の違いを認め合う「対人関係能力」の構築が必要だと考える。(豊嶋竜也)

「珈琲・ホビー・ハウス3」カフェレポート編集班

編集長・記事：小川優太

記事：村上千宥理・依光駿人

寄稿：島健太・豊嶋竜也

カレンダー作成：米谷聡馬

解説・校正・校閲：山中雅大

Special Thanks：熟読してくれた「あなた」★多



2023年度 珈琲・ホビー・ハウス3 活動カレンダー

実施日	企画・活動内容 ※()は担当・企画者	参加人数
5/19/2023	カフェ説明会(山中)	10
6/19/2024	「役職」決め会議企画(建部・大野)	18
7月14～15日	鬼(嫁)の居ぬ間に合宿企画(山中)	11
8/28/2023	「ヴァイオレット・エヴァーガーデン」視聴会企画①(大野・井上)	13
	企画叩き上げ会議企画①(大野・山中)	11
8/29/2024	企画叩き上げ会議企画②(大野・山中)	17
	「ヴァイオレット・エヴァーガーデン」視聴会企画②(大野・井上)	17
8/30/2024	「ヴァイオレット・エヴァーガーデン」視聴会企画③(大野・井上)	17
9/20/2024	「スキンケア取捨選択」企画①～スキンケア編～(谷澤)	16
	「スキンケア取捨選択」企画②～メイクアップ編～(谷澤)	13
9/24/2023	「ミステリと言う勿れ」視聴会企画①(大野)	10
	大学祭企画①～会議・環境テスト～(豊嶋)	14
10月～2月(継続中)	カフェ革命企画(吉田・泉谷)	?
10/5/2023	なんの会議なん?会議(大野)	13
10月12日～14日	第3次飯テロ企画(山中)	?
10/12/2023	大学祭企画②～前々夜祭～(豊嶋・森本・小川・林野)	22
10/13/2023	大学祭企画③～前日準備～(豊嶋・森本・小川・林野)	18
10/14/2023	大学祭企画④～本祭～(豊嶋・森本・小川・林野)	19
10/18/2023	「ミステリと言う勿れ」視聴会企画②(大野)	13
	やっぱりなんの会議なん?会議(長尾)	12
10/22/2023	「ミステリと言う勿れ」視聴会企画③～映画館～(大野)	14
11/9/2023	ウルトラ企画第一号企画①(米谷・島)	13
11/10/2023	ウルトラ企画第一号企画②(米谷・島)	15
11/30/2024	フォーラム会議企画(豊嶋・大野・上松)	14
12/13/2024	企画叩き上げ会議企画③(大野・山中)	15
12/15/2023	燭火礼拝企画(前田)	9
12/20/2024	企画叩き上げ会議企画④(大野・山中)	14
1/28/2023	アスレチック企画(井上・溝淵・前田・村上)	14
12月初旬～2月1日	フォーラム準備・制作(メンバー全員+山中)	?
1月中旬～2月上旬	マグノリア・カフェレポート準備・作成・推敲・校正(村上・小川・依光・泉谷・前田)	未定
2月実施予定	バレンタイン企画(島・豊嶋・大野)	未定
2月実施予定	懺悔企画(前田)	未定
2月実施予定	常識確認企画(前田・米谷・林野)	未定
2月実施予定	レクリエーション企画(長尾・岩佐・上松)	未定
2月実施予定	卒論・レポート対策講座企画(吉田・泉谷・大野)	未定
3月2日～3月3日	高知お泊り企画(前田・溝淵・岩佐)	未定

※2024年2月上旬時点において、2023年度の本カフェ活動は、計16企画、31回、延べ367人の参加人数、約160時間であった

The Strength of Weak Ties 5.0

担当教員：福永 健一

ネルソン橋本 ジョシュア諒

活動の理念

人とのつながりが重視される世の中である。友人、恋人、同学に同窓、同僚といったつながりは、かけがえのないもので、金で買えぬ財産として重宝されている。

しかし、アンソニー・ギデنزがいうように、現代社会では、人とのつながりを獲得する場が、学校や職場や市場化された趣味などに限られがちである。すなわち、現代社会における親密性の源泉は、ほとんどが「脱埋め込みのシステム」の中にしかない。平たく言えば、自分が住む近所の人や、よく行く街ですれ違うような人と知り合うことは全くなく、同じ学校や職場の人や、商品などを介して趣味や価値観が合う人しか、友や恋人や仲間がいない、ということだ。

その何が問題か。たしかに、同級生や同僚や趣味の合う人同士の関係は、強い絆をつくりだす。相互行為と情報共有を積み重ねることで、トラブルや悩み事を相談しあったり、情緒をぶつけあったりできる関係になる。それゆえ、かけがえのない仲間となることもある。

とはいえ、そうした「強いつながり」だけが人間に幸福をもたらすのかというと、そうでもない。M. グラノヴェッターは、たとえば仕事にありつくきっかけは、普段会うことも連絡を取り合うこともなく、気や趣味が合うわけでもない「顔見知り」程度の人である傾向を明らかにした。つまり、自分に人生の転機をもたらすのは、「強いつながり」よりも「弱いつながり」の人であることが多いというのだ。当然すべてがそうではないにしろ、弱いつながりの社会関係も、幸福や利益をもたらさるのである。

しかしながら、昨今は人々の多くが、「弱いつなが

り」を築こうとせず「強いつながり」に固執する傾向があるように見える。要するに、問題は、学校や職場や趣味の外に、友や恋人や仲間もいなければ、つくろうともしないということだ。

皆さんにはここで、「強いつながりとのコミュニケーション」ではなく「弱いつながりとのディスコミュニケーション」について考えてみてほしい。

「弱いつながり」の知人はいるか？つくれるか？おそらく、いないし、うまくつけれないのではないか。では、どう作るのかを学ぼうではないか。実際につくりについてみようではないか。親密性の技法をアップデートし、ひと皮剥けようではないか。こうしたことは、いわゆる「世間との付き合い方」のことである。だから、オッサンが言うような「社会勉強」にみえなくもない。しかし、それが意外と大事であることは上述したとおりである。

とにかく、社会学という学問を、実践してみようではないか。問いは以下のようなものだ。「弱いつながり」をどのようにして形成するか。それは、既存の友人知人とは異なり、「システム(制度)」の外側にいる。そういう人とつながるには、どこにいき、なにをし、どうすればよいのか。「強いつながり」という内輪ノリから脱し、「弱いつながり」の輪の中に入っていきにはどうすればよいのか。翻って、「弱いつながり」は、どういう問題をはらんでいるか。自身の社会関係資本を批判的に捉え直し、「弱いつながり」について考え、実践することが本カフェの目的である。

2023 年度活動報告概要

2023年は、コロナウイルスの猛威が収束した年だといってよいだろう。従来のように、集まって何かす

ることができるようになった。喜ばしいことである。とはいえ、世間の人々は、ひとたび元通りになれば、手で口を押さえずに堂々と咳やくしゃみをするし、ろくに手も洗わない。人間というのは、すぐ忘却し、まったく^{アップデート}できない生き物であることがよくわかる。同じ人間である我々は、果たして親密性の技法をアップデートできるのだろうか。

以下より、これまでの活動について簡単にふりかえってみたい。6月に始動し、2月下旬現在までで計10回の活動があった（下記表を参照）。福永とネルソンで分担し、これらについて概説していく。

これまでの活動記録一覧

日程	活動内容と場所
6/13	ランチミーティング@ラタ・タコス
7/23	第 57 回善通寺まつりで食べ歩き
9/28	徳島県上勝町「ゼロ・ウェイストセンター」を運営する大塚桃奈さんの講演@522教室
10/14	輸入ドリンク販売@学祭
10/31	香川大学の二ツ山達朗准教授の講演@522教室
11/10	「香川モスク」見学@坂出
12/1	忘年会@焼肉ソウル
1/15	元イスラエル兵士・木製家具作家のダニー・ネフセタイさんの講演@妙延寺
2/17	小豆島スタディーツアー@小豆島
2/22	水俣病センター相思社職員の永野三智さんの講演会@丸亀市部落解放・人権啓発センター／ミャンマー音楽研究家の村上巨樹さんのトークイベント@電子音楽喫茶LUX



第1回目のランチミーティング（2023年6月13日）

まず、6月のランチミーティングでは、メンバーの顔合わせと顔つなぎをかねて、食事をしながら本カフェの理念を伝えた。

7月の善通寺まつりでは近隣の飲食店を運営している人たちが出店し、近隣の住民が祭をみに出ている。学生たちと飲み食いしつつ、近隣の人と顔つなぎするなどした。ダンスや「よさこい」で四国学院生が祭に申し込んで参加していた。学生たちが自分でもこういうところにコミットできるのは素晴らしいことである。

10月の学祭では、飲料を販売した。わたしはゲストで来ていたお笑い芸人のゴー☆ジャスとママタルトに夢中で、あまり記憶がない。飲料はよく売れたようである。以下より、ネルソン先生からの活動報告である。

（福永健一）

「たまたま居合わせた人々」とつながる作法

たしか最初はX（旧ツイッター）のタイムラインで見かけた香川で新しくできたモスクでの交流会の案内。詳しく読むと、イベントまで1週間を切っていた。久しぶりにアメリカに帰省していたが、帰国後の翌日にイベントが開かれるようだ。ポスターの「入場無料、カレー付き…」という誘い文句に惹かれて、同僚のF先生にすぐ連絡してみた。「空いている」と期待通りの返事だった。「時差ぼけなんてどうにかなる！」行くしかないと確信した。8月下旬の夏のジメジメとした空気が残る夕方に、F先生を車に乗せて、香川モスクを初めて訪れた。ナビの案内に裏切られ、一度は通り過ぎたモスクによりやく着くと、駐車場にはすでに多くの車が並んでいた。一見、モスクは大きな倉庫のような建物に見えたが、車から降りてよく見ると「KAGAWA MASJID」と大きな緑の文字の看板があり、そして入口付近には花柄の装飾が施され、イスラム教のシンボルである三日月と星のマークを載せた金色のドームが建てられていた。靴を脱ぎ、いざ礼

拝堂の中へと入ると、大勢の人が今日のために集まっていた。少しガヤガヤしている感じだったが、在日ムスリムの人たちと私たちのような来訪者が混ざって小さなグループを作って座り、アットホームな雰囲気もあった。若い青年がすぐに私たちのことに気づき、「ようこそ、何か質問があったら聞いてね」と流暢な日本語で優しく声をかけてくれた。彼の歓迎の一声で緊張も一気にほぐれ、温かいムードの中これから繰り広げられる素敵な夜の良い前兆を感じ取れた。

そもそもこのイベントを知る前から香川モスクは気になっていた。フリーライターの岡内大三さんが香川モスクの建立までの道のり取材していて、それが2023年1月に1冊の本となった(『香川にモスクができるまで 在日ムスリム奮闘記』晶文社)。実は岡内さんがこのイベントを企画していて、本の主人公、モスク建立計画の中心メンバーであるインドネシア出身のフィカルさんとのトークセッションも今日の催しに組み込まれていた。フィカルさんにとってモスクの存在意義の1つには「日本社会との架け橋になるという目標」があり、地域に開かれたこのイベントはまさにそのような場を提供していたように思えた(岡内 2023:284)。

さらに話が5年前ほどに遡るが、ムスリムに限らず、香川県在住のインドネシア人コミュニティに私自身が関心を持ち始めたきっかけは、3人のインドネシア出身の青年との出会いにあった。溶接所で働く彼らはキリスト教徒で私が通う教会に帰国するまで通っており、彼らと親交を深めた。香川にいるインドネシア人の多くがムスリムであることは彼らからも聞いていた。香川県が発表した2023年度のデータによれば、香川県で暮らすインドネシア人だけでも1700人以上、香川県の在留外国人総数は1万5000人以上に上り、この10年で2倍近く増えている(香川県庁 2023)。私が仲良くなった教会のインドネシア人のよ

うに技能実習生として来日している外国人も年々増えている(特定技能などを入れると香川の在留外国人の半数以上が「活動に基づく在留資格」を持っている)。著書の中で岡内さんも指摘していたが、外国出身の人たちの存在感が地域で目立つようにはなつたが、「周囲の日本人」との交流は薄い(岡内 2023:111)。もちろんその逆もある。国籍、宗教、世代などの違いを越えて、良好な関係を築く様子は著書の中でも鮮明に描かれていた。教会を通して育めたインドネシア人との友情は私にとっては最高の宝物だった。モスクも、つながりを通して人の人生を豊かにする可能性を秘めているに違いない。キリスト教を教えている身として、8月のモスク訪問の理由にはイスラム教への学問的興味もあったが、それ以上に日本で暮らすマイノリティーの暮らしへの強い関心があった。

トークセッション、そしてカレーを囲んでの食事会の後、リーダーのフィカルさんとも連絡先を交換し、盛況のうちにイベントが無事終わりを迎えた。帰る途中には心の中で今度は学生と一緒にモスクにまた訪れたいという気持ちが高まっていた。その後、フィカルさんとは2回ほど電話でのやりとりがあり、本の中で綴られていた優しさや兄貴の気質が声を通して伝わってきた。「金曜日の正午過ぎの祈りの時間に来て欲しい」とのことで、モスク見学がようやく実現したのは11月の下旬だった。蒸し暑いあの8月の夜から、過ごしやすい気候へと変わっていた。学生3名とF先生と一緒に祈り会を見学した後、そのまま帰る予定だったがビリアニをご馳走になった。フィカルさんをはじめ祈りの時間に参加していた他の人たちとも話ができ、これを機にこの緩やかなつながりをこれからも大事にしたいと思っている。私にとっての教会でのインドネシア人との出会いのように、学生にとってもこのモスクでの出会いが、何か良いきっかけになればと密かに願っている。



香川モスク（2023年11月10日）

今年度のマグノリア・カフェの活動を振り返ると、改めて思うのは、モスクでの交流のように慣れ親しんだ環境＝〈故郷〉の外にあるつながりというものには私たちに新たな気づきを与える。例えば秋学期に開いた2つの講演会でゲストスピーカーが話していたことを思い出す。徳島県「上勝町ゼロ・ウェイストセンター」の運営に関わる大塚桃奈さんはスウェーデンなどへの留学を通して、「サステナブル」や「ゼロ・ウェイスト」の考えに触れたことを紹介しながら、学生たちに留学を勧めていた。香川大学で人類学などを教える二ツ山達朗先生はJICAの青年海外協力隊員としてチュニジアで経験したこと、学んだことが今の研究や仕事に大きな影響を与えていたことを生き生きと語っていた。〈故郷〉を一旦離れることによって、広がる世界があるのだと、2人の話を聞いて思った。

この点で、1月に参加したイスラエル出身のダニー・ネフセタイさんの平和についての講演会も興味深かった。埼玉県で木製家具職人として働く傍らネフセタイさんは全国で反原発や反戦に関する講演を続けている。ネフセタイさんの講演内容の説得性は、情報量や人柄の良さにもあるが、彼が体験した〈変化〉にあると感じた。空軍パイロットへの憧れやイスラエルへの愛国心などが、日本での生活を通して少

しずつ問い直されていくのだ。多くの方がより幸せになるために彼が関わり始めた地域に根ざした社会活動を通して、人権意識が高まっていくプロセスを垣間見た。〈故郷〉を離れたことによって、得られた鋭い知見だ。

国を出なくても、自分が〈故郷〉と思っているところには色々な背景を持った人たちがすでにいる。その人たちは、自分も含めて、少し雑な表現かもしれないが「たまたま居合わせた」人たちなのだ。「故郷は孤独に懐かしむものではなく、たまたま居合わせた人々と一緒になっていくものだと思う。」とライター望月優大さんがここで表現している感覚が思いやりのあるつながり方への1つのヒントであるように受け止められる（望月 2019: 10）。「たまたま居合わせた人々と一緒になっていく」という感覚が大事。〈弱いつながり〉、〈強いつながり〉と様々なつながりがあるが、この感覚があれば排除の道ではなく〈共生〉の道が拓かれていく気がする。

（ネルソン橋本ジョシュア 諒）

参考文献

- ・ 香川県庁, 2023, 「香川の国際化-データブック-」, (2024年2月6日取得, https://www.pref.kagawa.lg.jp/kokusai/data_book/sl45bd190111145325.html) .
- ・ 岡内大三, 2023, 『香川にモスクができるまで 在日ムスリム奮闘記』 晶文社.
- ・ ダニー・ネフセタイ, 2023, 『イスラエル軍元兵士が語る非戦論』 集英社.
- ・ 望月優大, 2019, 『ふたつの日本 「移民国家」の建前と現実』 講談社.

空海カフェ

担当教員：伊藤 松雄

わたしたちの活動

のどかな日本の原風景として日本最初の国立公園に指定された瀬戸内海地域は、かつては希有な景勝の地として名を馳せていた。しかし、今では山は削られ、海はゴミで汚れてしまっている。この現状は、多くの人々が身近な風景を無価値と捉え、安易な開発を容認してきた結果である。はたして、本当に価値がないのだろうか。身近な風景に潜在する自然ならびに文化的価値を再発見し、その意義を見いだすことで、保全の心を育成できる。



崩れゆく身近な環境

本学のある善通寺市をはじめ、香川県は史実として2000年以上の歴史を誇り、瀬戸内の古代都市として栄えてきた。そのため、多くの文化財や文化施設が今日まで伝えられ、県内の随所に2000千年の歴史が刻んだ文化的景観が見いだされる。すなわち、香川県は上述の問いを実践する上で好適な地と考えられ、私たちが身近な風景の中に埋もれた自然や文化的価値を再発見できるのみでなく、これをまとめて小冊子やリーフレットとして発信することで市民に上述の問いかけをすることができる。

「問い」の実践

前述の「問い」を具体化するために、学習のみに留まらず、積極的に発信した。そこで、以下の3点を遂

行した。1. テーマの設定：善通寺市や香川県の身近な風景を対象とし、文化を生み出す契機となった自然や自然に埋もれた文化財を探索し、自然と文化の相互作用の観点からそれぞれの成立に関わるテーマを設定した。2. 現地体験と理解：具体的なテーマに沿って現地に赴き、現状を見聞取材し、その成立について文献調査を行った。さらに、テーマの要点を整理し、自然や文化的価値を概観した。3. 発信：整理・概観した内容を冊子やパンフレットにまとめ、善通寺市内および県内で配布した。さらに、冊子やパンフレットの配布状況（設置した配布物の減衰）を調査することで、「問い」の実践の有効性を把握し、次の活動の反省点として活用した。

本年度は昨年が続く大正レトロとその調査中に発見した社寺仏閣の動物たちをテーマ対象にした。これらについて現地調査や文献探索を行い、例年のようにリーフレットにまとめて発信した。その内容を以下に述べる。
(伊藤松雄)

1. 善通寺市における実践

善通寺市では、昨年と同様に市内のレトロな建造物群の建築様式を確かめながら、その街並みの構成について考えた。明治後期に旧陸軍第11師団が設置された善通寺市は、大正期には爆発的に人口が増え、街並みが整えられていった。市内には、当時の建造物が残存し、往時の様子を伝えている。一方、その調査活動の一環として善通寺の建造物を観察する過程で、動物の装飾品が数多く存在することに気づいた。そこで、社寺仏閣に人知れず飾られた動物たちに焦点を当て、その文化的背景を観察した。この活動を金刀比羅宮での観察へと発展させ、リーフレットにまとめ、大学祭において発表した。
(伊藤松雄)



普通寺市内の調査風景

2. 香川県内外における実践

本年度の活動は2つの活動内容からなる。すなわち、(1) 昨年度のテーマの確認および新たなテーマの発掘と (2) 大学祭への参加を前提とした活動の2つである。

(1) 新たなテーマを探す活動

昨年度は、高松市の明治大正期の建物群を「鬼滅巡礼2」としてまとめることができた。本年度は、この内容を確認すべく、松山市内の建物群を見学した。夏目漱石の「坊ちゃん」にも登場する松山の風景は今も健在で、明治後期や大正の街並み見学には好適地であると再確認できた。

(伊藤松雄)

大正時代に建てられた萬翠荘では、ドラマや小説でしか目にすることがないような洋風で気品あふれる文化に触れることができた。また、道後の商店街には、特産品を使用した食べ物やフォトジェニックなスイーツのお店が立ち並び、胸が踊るような気持ちになった。そして同時に、店舗の内容や装飾、立地によって賑わいの商店街へと様変わりすることに驚いた。私自身が興味のある「まちづくり」にとっても参考になった。

(社会学部1年・池川友菜)

道後の町は、タイムスリップしたようなレトロな建物であふれていた。家やビルが立ち並ぶ街にひっそりと立つ萬翠荘は、まるで木々の間から姿をのぞかせているようだった。

(社会学部1年・木下琴仁)

萬翠荘のような西洋建築物の中に入るのは初めてだった。建築物の外観をはじめ、装飾や調度品に至るまで豪華で、日本にいながらフランスを感じる事ができた。

(社会学部1年・小田萌々子)



松山市内の調査風景

社寺仏閣の動物の調査は、金刀比羅宮で続けた。驚くことに、金刀比羅宮で登場する動物は種類や数で圧倒的に普通寺を上まわるもので、その動物は金刀比羅宮の参詣道を進むにつれて変化していった。土産物店が建ち並ぶ街並みでは、狛犬や鯨鯨などの守護動物が外敵を威嚇し、大門をくぐって境内に入ると、鶴と鹿、馬やこんぴら狗などの使いの動物が登場する。旧松尾寺の金堂だった旭社前には象頭山金毘羅大権現を思い起こさせる象が刻まれている。さらに、賢木門をくぐり神域に入ると、麒麟、鬘鬘(ひき、龍の子)、龍などの瑞獣や獅子、鯉なども登場する。



灯籠に付けられた麒麟

本社付近の灯籠には、天狗の団扇とともに多くの蛟龍(こうりゅう、龍の幼生)が装飾され、金毘羅大権現の文字も刻まれている。また、旭社2階の軒には

ワニが刻まれている。蛟龍は梵語のクンピーラ（ヒンズー教の水神ナーガの乗り物で、鼻の長いワニ）と同一視され、クンピーラ＝宮毘羅（くびら）＝金毘羅（こんぴら）に変化したと考えられている。まさに、「こんぴら」を表す動物たちであふれている。明治の神仏分離令によって金毘羅大権現は廃止され、金刀比羅宮へと生まれ変わったのちも、灯籠や建造物群には江戸期の金毘羅大権現の風景が残っていたのだ。これらの観察は、リーフレット「こんぴらさんで会うパワーアニマル」と題して発信した。さらに、金刀比羅宮で行った活動結果は、大学祭でも発表した。

(伊藤松雄)



龍の制作風景

大学祭では、メンバー全員が団結して作製した龍が子どもたちに大人気となった（下図）。その結果、7号館2階という目立たない部屋の展示にもかかわらず盛況を収めた。延べ80人の客を迎え入れることができた。

(伊藤松雄)



リーフレットの散策地図

(2) 大学祭への参加を含めた活動

先述のように、「こんぴらさんのパワーアニマル」をリーフレットにまとめて発表するとともに、大学祭で発表と展示を実施した。イベントでのコンセプトは極めて重要であるため、調査過程で最も印象に残った瑞獣、龍をシンボルとして江戸期の「パワーアニマル」を「おみくじ」とともに紹介した。「おみくじ」では、守護獣、使い獣、瑞獣と分け、これを「おみくじ」の吉凶とした。



大学祭では龍が大人気だった

大学祭実施にあたって最も難しく感じたことは、どうしたら多くの人に来てくれるのか、を考えることだった。そして、どのように工夫したらお客さんに興味を持ってもらえるのか、どれくらいの集客数が見込めるか、などのイベントの本質的な事柄を実践的に学ぶことができた。具体的には、大学祭実行委員会より7号館の奥まった部屋を会場として与えられたため、どのように客をそこまで導くのか、メンバーと何度も検討した。その結果、まず7号館前に目立つものを置き、さらに会場へと導く仕掛けをつくることにした。お菓子とジュースを提供することで、客が来場しやすい素地を作ることにした。具体策として、会場の7号館前にキラキラしたピンク装飾を施した龍を設置し、その龍の口の中に整理券を置き、整理券を持った人のみが、おみくじを引けるように設定した。当初、30人程度の集客数を見込んでいたが、実際には80人と想定以上の来客になった。この成功の原因は、無料提供のお菓子やジュースというよりは、客の心を射止めたピンクの龍にあると思われる。大学祭などの公共イベントは利益のみを求めるのではなく、どのようにしたら多くの人々に喜んでもらえるかの方が大切であり、それを実感した大学祭であった。

(社会福祉学部1年・三木杏珠)



会場内の様子

日韓文化コラボ

担当教員：李 静淑

わたしたちの活動

映画、音楽、ファッション、スポーツなどグローバル化で境界が崩れつつある。韓国ブームにロマンを感じても、その裏側にやはり日本と韓国とは相当違うのだという日本人の伝統的な韓国観が残っているように感じる。

この心理的ミゾを感情的議論にしないために、一定の距離をおいて話そうとすると、かえってお互いの心理的距離が拡大する。双方の信頼関係を築くためには、例え、言い争ってでも話し合い、小さな差異は認め合って、その上で共通の認識を持ち合うことが、結局は心理的距離を縮めることに繋がるであろう。

まず身近な現状を認識し、考察する。距離的に近いことから風習など似ているところもあるが、微妙な違いもある。多少の差異を乗り越えて、大局的な見解を相互に持つことが肝要である。このマグノリア・カフェがささやかでも、お互いの理解に近づくための一歩になることを強く願っている。

日本と韓国は、「近くて遠い国」と言われているのは何故なのか、「近くて近い国」にするには何が必要なのかを考えるためにも、まず、戦前の歴史観から解放され、お互いに独立国同志の尊厳と理解が最優先されなければならない。

しかし、日本では似て非なるものへの嫌悪感と昔の優越感が未だに残っているように思う。そして経済的に対等になった今もお互い自らと区別したい気分があるように感じる。また、韓国は歴史問題を提起し続けるのは「近い」ゆえに自らを日本とは差別化したいところがあるからではないだろうか。

上記を踏まえて、現在の日本と韓国の社会、文化をはじめ、様々な分野を比較しながら、両国の友好な関

係づくりを深めるコラボ（コラボレーション）を目指したい。



日韓シャトル外交は継続するのか

日韓シャトル外交とは、日本の内閣総理大臣と韓国の大統領が年1回相互に訪問し、両国間の課題を話し合おうというものであり、2004年から開始されている。

当時、リゾート地のようなところで気軽に行うことを目的として始まったシャトル外交であったが、2005年6月に小泉氏が韓国を訪れた以降は、靖国問題（小泉純一郎総理大臣の5回目の靖国参拝かつ、2005年は終戦の日である8月15日の参拝）などにより、一度中断されている。

その後、2008年2月、韓国の李明博が大統領就任後初の日韓首脳会談にて、シャトル外交の再開に合意したことで、2008年4月、3年ぶりに復活した。

韓国併合100年にあたる2010年は、韓国内の反日感情が高まり、シャトル外交は実現せず、翌年2011年には、シャトル外交が行われたが、その後は日韓関係が悪化したため、シャトル外交が長らく途絶えたままとなった。

そして、2023年3月16日、岸田文雄総理と、韓国の尹錫悦大統領が日韓首脳会合を行い、シャトル外交を再開することで意見が一致したことにより、シャトル外交が12年ぶりに再開された。



日韓首脳会談にて握手する場面

このような歴史からみても、韓国での対日感情の変化は、政治的な問題や両国政権の外交政策などによって変化しており、日韓関係に大きな影響を及ぼしている。

日本と韓国の交流にあたって、重要な意味を持つ日韓シャトル外交であるが、今後も継続することができるのだろうか。従来の日韓関係は、日本が韓国を支配していた歴史により、良好な関係を築くことが難しい状況が続いていた。

ところが、1998年10月に当時の金大中（キム・デジュン）大統領と日本の小淵恵三首相との間で交わされた「21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ共同宣言」で、未来志向的な関係を目指すことが掲げられたことを境に、日韓関係は好転し、近年では、若者を中心に音楽やドラマなど、日韓両国の文化交流が盛んに行われるようになっていく。

このような歴史の背景から、これからの日韓関係の鍵を握るのは若者であると考えられる。現在の文化交流の中心となる20～30代の若者たちは、上述の「日韓パートナーシップ宣言」によって、韓国での日本の大衆文化が開放され始めた前後に生まれ育った人びとであり、日本に対し、肯定的な感情を持つ人々が多い世代である。

特に、韓国の若者は、従来の歴史にとらわれた価値観を持つ人が少なく、まさに未来志向的な関係を築くための重要な役割を担う存在といえよう。

上記のことから、日韓関係の向上のための活躍を若者が中心となって、今後、更なる文化交流を通して日

韓シャトル外交が途切れることなく、継続していくことを願っている。（文学部3年・山村範勝）

K-pop が世界的に人気を集めている理由

韓国では、K-pop アイドルになるためには事務所の練習生になる必要があり、まずオーディションに受からなければならない。2～8年ほどの練習生期間を経てデビューを果たす。

オーディションの段階で素質のある子を選んでいるとはいえ、短期間でデビューできるほどに成長するところには、個々の才能だけではなく、育成システムに秘密があると言われている。その育成システムの特徴の一つは、毎月の「評価」制度にある。

日本の芸能事務所と違い、韓国の場合、練習生たちは毎朝、事務所に出勤する。そこで授業のような形式で、歌とダンスの基礎だけではなく、言語や話し方、マナーなどを学ばせる。ただ学校のように教えるだけではなく、自分たちの長所と短所を徹底的に分析させ、成長を促す。

毎月、主に月末に事務所の社長や指導者ら20人ほどの前で評価が行われる。練習の成果が見られないことが続くと退所させられることもある。そこでは、練習生が日ごろあまり会うことのない事務所の社長やクリエイティブ責任者から直接アドバイスを受けたり、厳しい評価を受けたりして、次の評価に向けてまた厳しい練習が続く。そこで上層部に見いだされることはデビューにつながるし、褒め言葉に練習生たちのモチベーションが再び上がるのである。

評価の場は、養成所、事務所内だけではなく、時には練習生に公演や大会に参加させて評価をすることもあ

る。韓国のアイドルの養成課程において日本との比較をしてみると、韓国はオーディションやサバイバル形式の番組で練習の様子やデビューまでの過程を放送していることが多いことがあげられる。

視聴者が練習生への投票や評価ができる参加型や、通常は見るできないデビューまでの過程を見ることができ、デビュー前から練習生を応援するファンを生むきっかけにもなっている。このようなファンの存在も相まって、さらに練習生のモチベーションをあげることもつながっていると考えられる。

このようにレッスンと評価を毎月繰り返すことで、多くの人材が短期間で目を見張るような成長を遂げられるようになっている。



オーディション番組の様子

また、練習生たちは芸能事務所が提供する宿舎に住み、共同生活を送ることが多い。これは、「インハウス・システム」と呼ばれ、SM エンターテインメントによって導入された。きっかけとなったのは、アーティストの私生活管理の重要性が重視されたことからである。

デビュー後もしばらくは宿舎で共同生活を送るグループが多いため、最近ではリアリティ番組や YouTube などに取り上げられるものからアーティストの私生活を知ることできる。その様子を見ていると、価値観や考えが違うためぶつかり合うこともあるが、共に生活をすることでお互いを深くまで理解し合うための貴重な機会にもなっている印象を受ける。

上述のように、歌やダンスだけではなく、マナーや私生活管理を含めた社会性を学ぶことのできる環境下での養成と、様々な人からの評価により、世界で活躍する人材を多く輩出しているのではないかと考えられる。

日本のアイドルは、デビューまでの養成期間が短く、未完成な状態から成長過程をファンに見せていくという特徴があるが、今後、両国のアイドルが互いに良い影響を与え、これからも K-pop を通して、さらなる日韓交流が深まることを期待したい。

(社会福祉学部4年・山本夏実)

なぜ、韓国漫画が日本で流行っているのか

日本は漫画大国として知られているが、数年前から韓国の漫画が「ピッコマ」や「LINE マンガ」等の漫画アプリを通して、日本でも人気を博している。

「Webtoon (ウェブトゥーン)」は、韓国発のデジタル漫画の一種のことであり、ウェブトゥーンの漫画は大きく2つの特徴がある。

1つ目は、縦読みであることだ。これはスマートフォンで読むには最適化した形である。日本の漫画のように見開きのページでインパクトを与えることは難しいが、縦読みであることで流れや動きが表現しやすいといった利点がある。

2つ目は、フルカラーであることだ。美しいイラストで視覚的にも楽しみやすく、色があることによって描かれている内容が分かりやすい。

フルカラーでは色塗りという手間も増えるが、その作業量の多さでも連載できているのは、脚本、キャラデザ、ネーム、着色と各工程に専門のクリエイターがいて、作画もキャラクター担当と背景担当で分かれているからである。



フルカラーで描かれる韓国漫画

日本ではアシスタントがいたり、原作と作画の担当が分かれていたりすることはあっても、ここまで分担して描かれているものはないだろう。

このような韓国で生まれた漫画形式は、近年、世界中で注目されている。

ここでウェブトゥーンの歴史を遡ってみると、縦読みであるにも関わらず、誕生したのはスマートフォンが普及する前であることが分かった。韓国は1990年代末、通貨危機（IMF）に見舞われ、出版などの紙文化が壊滅的なダメージを受けた。

しかし、その一方で、インターネットの普及率は急上昇した。インターネット環境が日本に先駆けて整ったことで、デジタルコミックの普及基盤が形成され、マンガの不法流通も起きることとなった。マンガのデータが勝手に共有されるようになり、作家や出版社に収益が入らなくなってしまったのである。

そこで救いとなったのが、ポータルサイトのDAUM（現在のKAKAO）であり、NAVERだ。ポータルでは無料でマンガが読めるので、不法流通する必要がなくなったのだ。

また、ウェブトゥーンが縦長なのは、ポータルを閲覧するウェブブラウザでスクロールして読むものだったからである。それが、その後のスマートフォンの普及につれ、縦長画面が功を奏し、ウェブトゥーンが注目されることに繋がった。

私個人の考えとしては、韓国漫画が日本でも人気を集めた理由は、「手軽さ」だと思う。スマートフォンで気軽に読めることに加え、基本的に1話～3話は無料で読めることが多く、いろいろな作品に挑戦しやすい。そこから気に入った作品は、購入もできるし、一定時間経過すると、無料で続きが読めるようになるので、お金をかけずに読むことも可能である。

特に、女性向けの漫画では、繊細できれいなイラストで描かれているため、それが多くの人を惹きつけることにも繋がっていると感じる。

文化というものは、国同士のしがらみを忘れさせ、互いに尊重し合えるものだと考える。日本の漫画にも韓国の漫画にも一長一短はあるが、両国が競い合う対象になるのではなく、手を取り合って、漫画という文化が日韓ともにこれからも発展していくことを望んでいる。（社会福祉学部4年・富澤侑生）

画像の出典

- ・「日韓のシャトル外交再開」
<https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/472818>
- ・「韓国アイドルを発掘」
<https://aleumtown.com/korean-idol-audition/>
- ・「俺だけレベルアップな件」
「ある日、お姫様になってしまった件について」
<https://piccoma.com/web/>

参考文献

- ・日韓関係改善へ動き出す 首脳会談で「シャトル外交」再開確認
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20230316/k10014010651000.html>
- ・日本と韓国の首脳、「シャトル外交」って？：朝日新聞デジタル
<https://www.asahi.com/articles/DA3S15630279.html>
- ・人材育成の参考に？韓国芸能界の養成システム
<https://money.smt.docomo.ne.jp/>
- ・なぜ KPOP はサバイバルが多いのか？
<https://kpop-times.com/2019/10/16/>
- ・WEBTOON とは？ 日本からヒットは生まれる？
<https://www.pixivision.net/ja/a/7779>
- ・縦読み漫画（ウェブトゥーン）日本の挑戦
<https://www.nhk.or.jp/shutoken/wr/20221221a.html>



5号館の演習室にてディスカッション
(2023年5月30日)

“不快適”な学寮の可能性を追う

担当教員：近藤 剛

活動の背景と問い

マグノリア学寮についての学寮生の不平不満をよく耳にする。「イベントへの出席を強制される」「意味のない他者との関わりを求められる」「ルールを破る者への対応が不十分。学寮生間での解決を求められる。大学と教員が解決しろ」……。これらの活動がすべて学寮の理念と目的に明記されており、入寮前の面接でそれを承諾し、毎月の奨学金を受け取る「学寮奨学生」として入寮してきているのに、不思議な若者たちである。

そもそも、大学寮の多くは入寮者による「自治」が前提で始まった。「大学生」にもなって、日常生活の些細な問題を学校や教員といった「権力」に解決を求めることは恥である。先人たちにはそのような感覚があったのかもしれない。否定的な見解が多い昭和の学生運動も、見方を変えれば社会的になんら力を持たない大学生が、それでも自らの信念を貫き通すために「権力」に立ち向かった、自立した「個」の存在があったからこそ起こり得た現象かもしれない。

そんな日本の大学生も、権力によってすっかり牙を抜かれてしまった。大学の寮は学生運動の温床と見られ、寮生が集団化しないように1980年代からは次々と個人化が進められた。完全個室では隣人との関わりも減らし、寮で実施するイベントなどは激減した。すなわち、「アパート化」である。数年で出ていくアパートでは、一致団結して権力に挑む構図などよほど起こらない。結果、日本の大学寮生は従来と比較して課題解決力や自己教育力を涵養する機会を逸し、大学や教職員などの権力に強く依存する傾向を持つようになったとされる。そう、アパートの住人が大家にクレームを入れる様子さながらに、である。

一方で、近年ではこうした大学生の傾向に警鐘を

鳴らす指摘も出てくるようになった。代表的なものに2011年1月の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」がある。ここでは、日本の教育課程において、社会的・職業的自立に向けた必要な基盤能力の育成が必要であるとされ、それらの育成には他者や社会とのかかわりが積み重なり、つながっていくことが必要であるとされた。これはすなわち、日本の若者（大学生）には、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤能力が身につけていないという指摘とも捉えられる。

マグノリア学寮は、個人化された「アパート寮」よりも確かに快適ではない。共用のトイレと浴室、当番制の清掃活動に加え、各種イベントの運営には個人的な結びつきの度合いに関係なくすべての学寮生への関わりを求められる。学寮内での問題発覚時にはまず学寮生間での解決を必要とする。しかし、このような学寮だからこそ、社会人としての基盤能力の育成につながるのではないか。そのような問いを持って始めたカフェである。

マグノリア・カフェの精神からは少々、逸脱する部分があるかもしれないが、主宰者の学寮アドバイザーには半ば強制的に参加してもらった。「個人化」に慣れた若者に、強制力をもって他者との関わりを持たせることに意味はあるのか。それを実践的に検証した本カフェについて報告する。

活動の概要

各学期ともに2週間に一度程度の頻度で活動を実施した。日程と内容は以下の表のとおりである。

年間の活動内容

	日程	内容
春学期	4/24	運動部新入生の顔合わせ
	5/15	全員顔合わせ
	5/30	新入生歓迎会
	6/13	障がい学生への理解 －視覚障がい者への支援－
秋学期	9/19	学寮イベントの企画①
	9/26	学寮イベントの企画②
	10/3	学寮イベントの企画③
	10/13	マグノリアカフェ・ストール (大学祭)
	10/31	学寮イベントの企画④
冬学期	12/7	学寮イベントの準備①
	12/14	学寮イベントの準備②
	2/5	学寮イベントの反省
	2/18	卒業生と退寮生を送る会

まず、春学期は主にメンバー同士が「顔を合わせたらいさつ程度はする」関係になることを目指して活動した。自己紹介や簡単なゲームを行い、新入生歓迎会も実施した。こうした活動は、当初考えていたよりも早くに学寮生間の仲を深めたようである。新入生歓迎会は大学近隣の飲食店で実施したが、場所がわからない新入生を上級生が集めて先導し、店にまで連れて行くという自発的な“先輩らしい”配慮も見られた。

また春学期の最後には、視覚障がい者への支援について考えた。クロックポジションで目の前の状況を説明したり、ペアになって交代でアイマスクを装着して誘導の方法と注意点を学んだりした。マグノリア学寮には障がいのある学生も在籍しており、非常時のみならず日常生活でもこうした学生に対して必要に応じて援助する意識を持ったようであった。



新入生歓迎会的一幕（2023年5月30日）

秋学期は、学寮イベントのうち主体的に運営することになったクリスマスメントに向けた活動を中心に行った。イベントの企画段階から積極的で前向きな意見が多数出され、他者の考えを受容しつつ自己主張する、建設的な雰囲気で開催された。また、集団における一員としての意識も高まり、春学期と比較して遅刻者や欠席者が激減したことも大きな変化であった。

企画内容がカラオケ大会に決定したあとは、機材と場所の手配や買い出し、司会者として場を盛り上げるためのパフォーマンスの提案など、各々が役割を自覚してその役目を誠実にこなそうとする姿勢が見られた。



話し合い的一幕（2023年10月31日）

冬学期は12月のクリスマスイベントの運営に注力した。年間活動として記載していない活動も含め、多くの時間を費やした。本番では各自が役目を全うし、少なくとも運営者自身としての自己評価は上々なものであった。

年明け以降はクリスマスイベント全般の反省と、年間活動の振り返りを行い、次年度以降の活動についても前向きに検討していった。本レポート作成時には実施していないが、卒業生と退寮生を送る会を皆が楽しみにしている。



振り返り活動的一幕（2023年2月5日）

参加学生の声

以下に参加した学生の年間の活動を通しての感想を記載した。

コロナ禍で他の学寮生とのかかわりが十分ではなかった中、この活動で野球部員以外の方と話すきっかけを得ることができた。学寮のルールを守る人がもう少し増えるといいな・・・。

（社会学部4年・正本叶翔）

主宰者より：学寮のルールを守る人が増えるように、正本くんには残りひと月がんばってもらいたい。

おいしいご飯を食べさせてもらえたら、もっと最高になる！

（社会学部1年・藤原涼介）

主宰者より：お菓子和ジュースを持っていくたびに不満そうな顔をしていたことを忘れません。

学寮アドバイザーが同じメンバーの元で活動し、結果的にみんなと仲良くなれたのでよかった。こうして集まりがあると話すきっかけになるのでいい活動だと思いました。

（文学部2年・曾我部みれ）

主宰者より：いつもピリッと刺激のきいたコメントをありがとう。

この活動があつてよかったと思う。普段関わることのない、接点のない人たちとのつながりができたからだ。イベントの運営は辛かったけれど、おかげで学寮内での会話が増えた。

（社会学部1年・今井真心人）

主宰者より：サンタクロース、超絶かわいかったよ。

他学年の人たちとの交流が深まったことがよかった。また、イベントでは達成感を味わえた。

（文学部2年・小松千紜）

主宰者より：リーダーのおかげで万事が滞りなく進みました。本当にありがとう！

交流の場になってよかった。どうしても参加できない時にグレイ文書やペナルティの対象になることはやめてほしい。

（文学部1年・雨森胡桃）

主宰者より：この活動そのものにペナルティはないよ。掃除がんばれよ。

学寮のイベント（特に運営）に対してやる気が出なかった。せめてアイスブレイクの機会をもっと増やしてほしい。強制させるだけでは意味はないだろう。

（文学部2年・山影遙加）

主宰者より：運営したイベントではりきって独唱していたじゃん。

活動の総括

学生の意見は、上述の通り賛否両論であった。学寮生間のかかわりが増えたとする肯定的意見の一方で、強制性を感じることに否定的な見方も存在した。

しかし、例え強制性が少なからず存在するとはいえ、こうした活動が結果的には学寮生間の人間関係構築の起点となり、深まりをもった発展のきっかけとなったことも事実である。そして、運営側に立ったクリスマスイベントにおける一連の活動は、他者と協力して目標を達成するという、社会的活動の疑似体験でもあった。そうしたことから、主宰者としては、本カフェに参加した学寮生が社会的・職業的自立に向けて必要な基盤能力の一端を経験し、実践することができたと考えている。

社会生活において様々な事象が個人化し、それに幼いころから慣れた現在の大学生にとって、“共に生き、共に学ぶコミュニケーション”を実践する空間であるマグノリア学寮は確かに快適ではないであろう。しかし、社会に存在する様々な問題（不快）の多くは他者との関係性に起因しており、それに対峙していくには大学生の頃から勇気をもって他者と関わりを持っていくことが必要である。そのための本学の教育機能の一つとして、マグノリア学寮の存在を学寮生にはぜひ前向きに捉えてもらいたい。そしてまた、前向きに捉えられるような実践的取り組みとして、本カフェに代表されるような活動を引き続き行っていきたいと考えている。

参考資料

- ・ 中央教育審議会，2011年，答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」。
- ・ 蝶慎一，2019年，「日本における学寮の歴史的展開と特徴－＜教育＞と＜厚生＞の視点からみた戦後初期の＜学寮像＞－」安部有紀子・望月由起・橋場論編，『学寮プログラムの現代的展開』広島大学高等教育研究開発センター。

Yongaku Well-being Network 2023

担当教員：北川 裕美子

活動の背景と問い

「Well-being」とは「心身および社会的に満たされ、その人が幸福で充実した状態であること」を指す言葉であり、近年は企業や教育機関などが「Well-being」を重視する姿勢を強めている。社会福祉の領域においては、従来の救貧的な「Welfare」から、「より積極的に人権を尊重し、自己実現を保障する」という意味として「Well-being」という概念を用いている。例えば、子どもにとっては、単なる保護の対象でなく、1人の人間として、権利主体として認知されることなどが挙げられる。このように「Well-being」が社会的に推進される一方で、この用語が、生活の満足度・マインドフルネス・健康といった多様な概念と混合されがちであり、無批判に肯定的な意義を持つことから、「Well-being」に異議を唱えることは問題とみなされがちであるとの指摘も存在する。例えば、Steven J. Jacksonらは「Well-being」の向上に努めていこうと表明している企業が、実際には従業員に負担をかけているといったスキームを「Well-being washing」と称し非難している。また、個人の「Well-being」を測る指標として、生活に関する全般的な満足度や、「主観的幸福感尺度」等が用いられ、定量的に把握しようとする試みがみられる。このように、「満足度」や「幸福度」のような単一指標で、いわゆるポジティブな感情に焦点を当てられがちであるが、平和、人間関係や自然との調和といった側面についてはその評価が難しいものもあり、特に西洋文化では軽視される傾向にあることが指摘されている。近年では、国内総充実（Gross Domestic Well-being、略称: GDW）が、文化的な多様性も考慮した多面的な指標として用いられている。しかしながら、数値化することが難しく、言語では表現しきれない「Well-being」が現代社会には多

く存在しているのではないだろうか。「Well-being」という用語が1人歩きをして、「権力場」（当事者が他者を犠牲にして自らの利益を増進させる場となるような状況）の増幅へと繋がることのないよう、しっかり吟味することが必要であると思われる。

本カフェでは、このような考え方にに基づき、現代社会における「Well-being」の実態について、大学内の所属や枠組みを越えた学生同士や、大学外に所属する様々な他者とのインタラクティブな関係（対話や身体表現等）を通して深掘りしていくことを目指す。

活動の報告

初年度の活動として、①マグノリア学寮生を主な対象とした交流活動、②子ども食堂を通じた交流活動、③小・中学生との身体表現（ダンス）を通じた交流活動の3つを実施した。

マグノリア学寮生を対象とした交流活動

初年度ということもあり、まずは学生自身が日ごろどのようなことに対して「幸せ」を感じるかといったことなどを、6月に食事をしながら考え、発表した。「部活動をしているとき」、「地元へ帰省しているとき」、「自分の好きなことをしておいしいものを食べているとき」など、それぞれが異なる価値観をもっていることなどを共有した。筆者がアドバイザーをしている学寮生を対象としたが、全員がそろったことはこれまでほとんどなかったため、良い機会となったと思う。

次に、学寮の運営企画であるクリスマスイベントに向けて、簡単な踊りを取り入れながら歌をうたうということを試みた。練習もかねて集まったのは3回

ほどで、学部も学年も、また各々の特性もバラバラな12名が、一緒に1つの踊りを作り上げていく中で、自然と会話が生まれ、わずかながら人間関係の変化を見いだせたように思う。本番当日は全員が一致団結をし、歌い踊り切ることができた。



天山閣にて初めての集まり（2023年6月）



クリスマスイベントでの発表（2023年12月）

これらの活動を通した振り返りについては、2月中旬に集まって話し合う予定である。彼らにとっての「Well-being」な状態とはどのような状態であるのか、彼らと今後も対話を重ねながら理解していきたいと考える。

子ども食堂を通した交流活動

筆者もかかわっている子どもの居場所支援を実践

しているNPO法人に協力してもらい、子ども食堂等の活動に参加した。10月に行われたハロウィン大会では、香川短期大学の学生たちが企画した運動会に参加し、子どもたちと積極的にかかわる姿が見られた。また運動会終了後には、子どもや保護者と一緒にご飯を食べた。12月のクリスマス大会では、明治安田生命の方々からのご好意で行われたビンゴ大会に参加した。お母さんの代わりに赤ちゃんを抱っこしながら景品をもらいに行く学生の姿などが見られた。これらの活動を通して、学生からは下記のような感想があった。

「子ども食堂は、保護者たちの情報共有の場所でもあるのだと思った。また、子どもとの接し方は直接かかわっていかないと身につかないと思うので、ボランティアに積極的に参加していきたい。目の前のことだけに集中せず、周りを見ながら活動するよう心掛けていきたいと思う。相手にとって自分が話し相手になってほしいのか、一緒に活動したいのか、そっとしてほしいのか、見分けられるように頑張りたい。今後は地域情報にも目を向けたり、自分の知っている情報を共有したりしていきたい。」

「子どもたちはすごく皆元気で、自分たちの体力が奪われるぐらいの元気で、自分たちも同じように楽しませてもらったのが印象に残りました。また、自分たちも子どもの頃はこんなにも元気だったんだなど、懐かしい記憶が思い出されました。このように子どもたちと一緒に楽しんで遊んでみることで、今後自分に子どもができたときには、同じように遊んであげて、楽しませてあげたいと思うことができました。」



ハロウィン大会（2023年10月）



クリスマス大会（2023年12月）

大学生活の中で、保育や福祉の方向に向かうことがない学生の場合、子どもと関わる機会はありませんのではないだろうか。振り返りの時間をとることはなかなか難しいが、彼らが子どもたちとかかわる中で、自分が考える「Well-being」な状態と、子どもたちのそれとがどのようなことが共通し、どのようなことが異なっているのか。そのようなことを考えていく機会を今後は作っていきたい。

小・中学生との身体表現（ダンス）を通じた交流活動

宇多津町教育委員会が、子どもたちに学校外でもスポーツや文化芸術活動に親しんでもらおうと、昨年8月に立ち上げた「地域クラブ活動」の一環であるダンス部の活動に参加した。

主に本学のダンスサークルに所属している学生が参加し、子どもたちと振付を一緒に考えたり、アドバイスをしたりした。

子ども食堂の場合は比較的幼児や低学年の小学生が多いが、本活動では高学年の小学生や中学生が中心に活動しており、子どもたちも積極的に意見を出し合いながら、学生と一緒に作り上げていこうとする姿が見られた。参加した学生の感想は以下の通りである。

「子どもたちみんなで案を出し合いながら1つのパフォーマンスを作り上げることで、子ども同士での関わりが増えたり、自分で考える力が付いたりといった成長に繋がっていると感じています。私自身も子どもたちみんなと関わることで、一緒に作ったダンスをみんなで踊る喜びを感じたり、何より子どもたちの可愛いダンスを見れたり、とても楽しい時間となっています。みんなで楽しみながら頑張る姿に元気を貰っています」



1回目の集まりで今後の活動について話し合う風景（2023年8月）



一緒に振付を考える風景（2023年8月）

昨年からはまったばかりの活動ではあるが、そのような段階から学生が継続的に関わることにより、子どもたちの様々な背景や心の変化などを知ることでもできるのではないだろうか。うまく踊ることができない子どもや、時に意見がぶつかり合う子どもなどもいる中で、学生自身がどのように介入したり見守っていけば良いのかを考え、実行する機会になってほしいと考える。

「Well-being」な状態を目指すということは、「肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも健康な状態」を目指すことであるとも言える。その手段としての身体表現は非常に有用と思われる。今後も活動を継続していきながら、さらにその有用性等について考えていきたい。

今後の課題

今年度は多くの活動をする事ができたが、活動についてじっくり振り返る時間が少なかったと感じる。本学の学生にとっての真の「Well-being」とは何であるか。まずは現代社会を生きる学生が、過去や現在において「Well-being」が高まっていると感じる時、あるいは「Well-being」の維持が困難だと感じる時はどのような状態である(あった)のかといったことを考えていきたい。その際に、前述の「Well-being washing」のプロセスが含まれていないかといったこ

とも検討していきたい。

さらに、社会全体を真の「Well-being」な状態にするために、自分達ができることは何なのかといった問いを、現代における様々な社会的課題と照らし合わせながら考えることを目指していきたいと考える。

参考文献

Steven J. Jackson, Michael P. Sam, Marcelle C. Dawson, and Daniel Porter, 2022, “The wellbeing pandemic: Outline of a contested terrain and a proposed research agenda”, *Frontiers in Sociology*.

科学の芽（目）を育ててみる会

担当教員：清水 一紘

活動の背景と問い

現代の科学技術の進歩により、私たちの生活はますます豊かで便利になった一方で、科学技術に強く依存するようになった。しかしながら、我々は、科学技術の本質を理解することなくブラックボックスのまま享受しているため、一度問題が起こると往々にして個人で解決が難しい事案が起こりえる。したがって、科学の探究方法を知り、科学的な視点と論理的思考を培い、現代社会を理解しようとすることは、我々にとって今後社会で生きていくうえで重要な課題である。一方で現在、「理科離れ」問題が顕著になり、子どもの理科に対する興味・関心を自然の学びに結びつける能力の脆弱性、国民全体の科学技術知識の低下などが問題視されている。原因の一つとして、日本の教育制度が詰め込み型の授業スタイルが主流のため、自然に触れあったり、実験や探究を通じて科学の楽しさを体験する機会が少ないことが挙げられる。本カフェでは、科学に興味がある学生だけでなく、科学に苦手意識をもつ学生や、自然とのふれあいや、実験や探究活動をあまり体験してこなかった学生を対象とし以下の問いについて活動を行う。「どのような自然体験や実験から、学生に自然科学に対する興味・関心が生ずるか?」、最先端の装置や学術研究に依らず、「身近なものを科学の目で見ると一般的な方法とは何か?」を問う。また、様々な自然や科学に実際に触れてみようをモットーとし、様々な活動することを裏目標とする。本カフェでの活動は、スイバ・ホタルの観測、善通寺の地形の調査、天文台への訪問といった自然科学に触れる活動だけでなく、SDGsやSTEAM教育といったイベントへの参加等、多岐にわたっている。

活動の報告

本カフェの担当教員は清水1人ではあるが、活動に関しては、本学の科学系教員の伊藤先生、鈴木先生にも協力を仰ぎながら行っている。

1. スイバの性比調査

雄と雌の性比は必ずしも 1:1 とは限らない。スイバは植物ではやや珍しい雌雄異株個体であり、その性比は 1:3~4 と雌が多いと考えられている。そこで学内のスイバの高さと性比を調べて、その謎にせまった。学生たちは、野外でスイバの雌雄を識別できるようになるために、植物体のつくりや花の構造を学んだ。その後、大学構内で雌雄を識別した上で草丈を測定した。得られた性比と草丈のデータからなぜその様な結果になったのかについて考察を行った。



図 1 左上：観察の様子、右上：スイバ、
左下：雄花、右下：雌花

学生のコメント：はじめは雄花と雌花の区別をつけるのが難しかったが、たくさん見ているうちに区別がつくようになった。たかが植物されど植物、植物も激しい生存競争を生き抜くうえで進化していったことを感じる事ができてためになった。

2. ショガク版ブラタモリ

善通寺は水不足な香川県において異質な場所で、いろいろな場所から湧水が湧いている。なぜ善通寺は湧水が多く存在するのか、まずは湧水とは何かから入り、大学周りの地形や地図を使ってこの謎を解き明かしていった。学生たちは地図を片手に、大学周りの高低差や水路のある場所をから、過去に善通寺の地下に川があってそれが、湧水として湧き出ていることを先生のガイドをもとに明らかにしていった。



図 2 左上：二頭出水©香川県、右上：観察の様子、下：土地利用条件©国土地理院

学生コメント：本当にブラタモリのように参加しながら楽しめた。普段は意識しない地図や高低差や川の流れ方の楽しみ方を改めて知ることができて、今後新たな楽しみができた。

3. 化学実験を通して学べる事

化学の不思議に触れてもらうことを目的として、「過シュウ酸エステル化学発光」の実験と「ゾウの歯磨き粉」の実験を行った。ただ実験するだけでなく、実験結果に対する結果について学生自身が「問い」を立て、その「検証方法」を考案し、実際に実験を試みる課題解決型のカフェを実施した。化学発光

では、実験溶液を少しずつ混ぜることで様々な色が再現できることを知ることができた。象の歯磨き粉は、濃度の高い過酸化水素水とヨウ化カリウム（ヨウ素液）に洗剤を混ぜたものを混ぜ合わせることで、爆発的に泡が発生するが、実験では過酸化水素やヨウ素液の濃度を変えて何度も行うことで、どのような条件でより、泡が激しく立つか検証した。



図 3 左上：化学発光、右上：象の歯磨き粉、下：実験の様子

学生コメント：自分で提案して、高校時代うまくできなかった事件のリベンジができて良かった。特に最後の実験はとてもきれいでいまでもすごく印象に残っている。実験自体は身の回りにあるものでできるみたいなので、家でも試してみたい！

4. SDGs、STEAM教育活動

公式に大学へ依頼が来たものや、学生や教員が見つけたSDGsやSTEAM教育に関わるイベントへ積極的に参加し、日本だけでなく世界の潮流を肌で感じるいい機会となった。実際にTeamLab主催のイベントや善通寺市主催のSTEAM教育のイベントでは、プログラミングやプロジェクションマッピングなど最新の技術に触れることができた。またSDGsのイベントでは、参加した学生は社会人の方と混じっ

て意見や議論を行いながら問題解決の手段を提案することができた。

学生コメント：今流行のチームラボのイベントに参加できて良かった。3Dデータ作成やプログラミングを身近に感じることができた。SDGsのイベントを様々な社会人の方とグループ活動ができ、様々な視点があることを知った。



図 4 左上：TeamLab イベント、
右上：STEAM 教育イベント、下：SDGs イベント

5. 夜の風景から考える科学とSDGs

その 1：岡山県井原市にある美星天文台に訪問し、天体観測を行った。天文台がある井原市は全国初の光害防止条例「美しい星空を守る美星町光害防止条例」が制定された市でもあり、天文の学びだけでなく、SDGsとも関連しているため、カフェ活動において非常に大事にしているイベントである。今回は、美星町のLEDライトを実際に観察したり、天文台に設置している望遠鏡を使って、土星、木星、球状星団、またアルデバラン等の有名な星を観察した。実際に101cm



図 5 左端上：土星、上左 2 番目：木星、上右 2 番目：星空、上右端：美星町の夜、左下：ホタルの観測、下中央：ホタル、右下：ホタルの乱舞

望遠鏡の接眼レンズにスマホのカメラ部分をつけることで、土星や木星をスマホの写真に収めることにも成功した。木星に関しては、ガリレオ衛星という有名な木星の衛星も写真を撮ることができた。

その 2：ホテルの乱舞で有名な徳島某所にてホテルの観察を行った。今回は暗く前に現場につくことでホテルのいる環境も同時に見てもらった。四国のホテルのサイトでは、ホテルとセットでカジカガエルと一緒に生息しており、学生にカジカガエルの鳴き声を知ってもらい、またホテルが生息する環境について解説を行った。また学生の中にはホテルの明滅にパターンがあることに気付いた学生もあり、科学的な活動も同時に達成することができた。

学生コメント：初めて天の川を肉眼で見えて感動した。香川でも見れるように井原市の取り組みを何とか広めていきたいと思った。知識では知っていたが実際に土星に輪があることを自分自身の目で確認出来て良かった。はじめはホテル (= 虫) かあって感じで乗り気ではなかったが、実際ホテルのはかなげな光を見たことでその考えは一瞬で吹き飛んだ。星空にしてもホテルにしても環境を努力して維持してくれている人がいることで守られていることを忘れてはいけないと思った。

6. 大学祭における演示実験

今年度の活動では、カフェ参加の学生がでんじろう先生のように科学的な演示実験を見学者に対して行ってもらった。学生には自分で提案した物や、こちらから提案したアイデア等思い思いに自由に準備してもらい、本番をむかえてもらった。見学者にも好評で、大変実りある学祭であった。当日はエッグドロップチャレンジ、ガムテープの粘着実験、エレキテル (100人おどし)、ジンベイザメの生態の発表の他、いくつかの常設展示 (糸電話、霧箱：放射線を見る道具、空気砲) を行った。

学生のコメント：人前で何かをするということはずごく苦手で作る前までは非常に乗り気ではなかったけど、いざやってみると緊張はしたけど、見学者の人も真剣に聞いてくれて、そして楽しんでくれているみたいでやったかいたがあった。



図 6 大学祭のカフェの様子

7. 8cm望遠鏡を使った太陽黒点の観測

太陽黒点の数は11年周期で増減を繰り返している。2024年現在、太陽黒点の数はピークに近づいており、太陽黒点を観測する絶好の機会になっている。望遠鏡の設定も学生自身に説明書を見ながらやってもらい、観測に関しても学生主体で行ってもらった。結果、現在の太陽にはかなりの数の黒点が存在することが分かり、実際に太陽活動（太陽黒点の数がピーク）が激しくなっているのを学生自身の目で確認してもらった。また、激しい太陽活動が地球に及ぼす影響も学生が望遠鏡を設営している間に解説をした。参加し

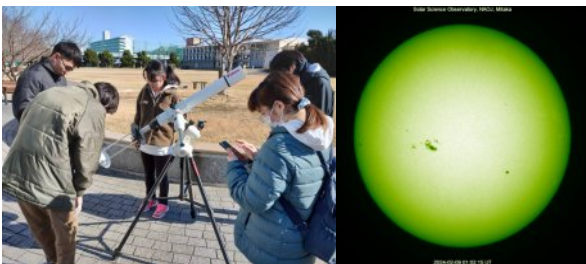


図 7 左：観測の様子、右：太陽黒点の様子

た学生の多くは、初めて黒点を見た学生もおり、大変興味を持ったようだ。観測を通じて科学への興味をひくことができて良かった。

学生のコメント：天体観測に興味があり参加した。望遠鏡を組み立てるのも初めてで、壊さないか心配しながら組み立てていたが、意外と簡単に組み立てることができて、びっくりした。実際に見た太陽は、写真で見るとような黒い点があり、また黒点が増えている話を見て、また少し時間をおいて太陽観測をしたいと思った。可能であれば夜に観測を行って、月や星雲を観測したなあと考えた。

8. 最後に

科学の芽（目）を育ててみる会では、去年同様に本学に所属している科学系教員による様々な科学分野の体験だけでなく、SDGsやSTEAM教育といった教育活動も行っている。本年度はこれまで報告した内容の活動だけでなく、今後も豊島での産業廃棄物の問題や、徳島県にあるSDGsの取り組みで有名な上勝町への訪問、科学博物館への訪問も考えている。また、8cm望遠鏡を使った太陽や夜の天体（月、星雲、構成）の継続的な観測も計画している。上記の活動は、今年度の活動で終わらずに、来年度を含め継続的に行ってきたいと考えている。科学に少しでも興味がある学生はぜひ一緒に活動しませんか？

参考文献

- ・ 野田市, 2021, 「スイバ」 (2024年2月9日取得, <https://www.city.noda.chiba.jp/shisei/1016739/1016740/kusakoho/kusazukan/1015479.html>)
- ・ 美星町観光協会 (2024年2月9日取得, <https://www.biseikankou.jp/>)
- ・ パナソニックホームページ (2024年2月9日取得, <https://www2.panasonic.biz/jp/solution/town/works/biseicho.html>)

自分と隣人の命をまもる

担当教員：清水 幸一

自然・生活体験活動で身につく防災力

自然体験活動自体は現場の暗黙知的な体験活動によって効果を得る。特に、感性豊かな幼小青年期に、良質の直接的な自然体験活動に触れることは、人生を豊かにさせてくれるのではないだろうか。『センス・オブ・ワンダー』著者であるレイチェル・カーソンは、知ることは感じることの半分も重要ではないと言い切っている。彼女は子どもたちが、自然体験活動で出会う事実が、やがて知識を生み出す種子であり、さまざまな情緒や豊かな感受性は、この種子を育む肥沃な土壌であり、子ども時代は、この土壌を耕すことの重要性を著書で述べている。

報告者（清水）が、長年職員として関わったYMCAでは、社会教育の領域で、先駆的な教育活動を展開してきた。

阪神淡路大震災時では全国のYMCA指導者が救援活動に従事し、筆者自身も震災現場でのボランティアをコーディネートする働きのなかで、彼らの自然体験活動経験自体が、現場での働きに、大いに役に立つことを実感した。

すなわち、自然体験活動や、キャンプなどの生活体験を通して身につけることができる判断力や行動力、協調性や社会性、また、危険を予測し回避力や困難なことをやりぬく強い意志は、災害に備え災害を乗り越えるといった防災に必要な力と同じものであると考える。

カフェに関わった学生たちの自然体験活動の体験が、学生たちへの防災教育として、学校で行われる防災訓練とは違った力、即ち現場で生きる防災力を身につけることができる有効な手段であることは間違いないと確信している。



体験活動（崖登り）

マグノリアカフェで行った防災教育

① 防災教育としての生活体験

社会教育としての青少年教育には、登山やキャンプといった自然体験を中心とした直接的な体験活動や、寝食をともにした生活を送るという生活体験活動が行われている。自然体験活動は、サバイバルスキルを取得する機会が用意され、生活体験活動での体験は、有事の際、避難生活の工夫などを学ぶ防災教育としての意味を持つ。例えば、災害時の避難所において多くの人と生活をともにすることから、精神的な負担が高くなり、お互いに遠慮や配慮をするといったことが求められる。今年度も数回実施した宿泊研修に参加した学生たちにとって、仲間との宿泊体験は、有事への備えとなる。また、公共の教育的宿泊施設を利用した場合は、小規模な施設を除き複数の団体が同時に利用され、見ず知らずの人とも共同で生活することになり、その意味が高まるのではないだろうか。当然、生活時間に沿った生活や食事の配膳・片付け、寝床の準備と片付け、使った場所の清掃など、身の回りのことは自分で行うという生活を送る。こうした共同生活体験から、公共のルールやマナーを遵守することの必要性を理解し、

実践する態度、他の人と協力することの意味を実感、そして行動に移す態度といった社会性が育まれるのではないだろうか。



体験活動（グループ・カバール料理）

② 防災教育としての自然体験活動

自然体験活動や生活体験活動を、防災教育を目的に指導した場合、教育方法の一つである問題解決学習の手法を積極的に活用した。問題解決学習とは、学生たちが知識を受容的に学習するものではない。直接的な体験後、自ら考え答えを発見していくような能動的な主体的な学習方法、即ち直接体験活動を積極的に取り入れた

メンバー自身の直接的な生活体験や自然体験活動では、自ら考え、情報を収集し、判断する力を身につけることが求められた。その力は、有事の際、最も必要なスキルであることは間違いない。



参加学生の声①

「防災について」：研究会などで、防災について先生から話があり、今年初めに起こった石川県の大き

な災害のようにいつ起こるかわからない状況で、今何ができるのか考えていきたいと思った。

「大学祭について」：防災力を得とくするための遊びである重さどんびしゃでは、実際同じ重さのものでも細かいものはと重さが分散され、軽く感じるということがわかった。また、記憶の達人では、同じ系統のものは覚えやすいが、全く違う素材のものは覚えにくいことを知った。

「愛媛大洲での体験について」：愛媛のキャンプ協会、ボーイスカウトの方と交流し、色々な職業についている方がおり、自身の将来につながる話もすることが出来た。一昨年と同じ傘袋ロケットの担当で、どうしても、幼児から小学生の子どもたちに伝わるかについてボーイスカウトの小学生と考えて説明することができた。

「室戸キャンプ」：ジオパークでは地震のプレートの成り立ちや、水深がどうなっているのかを知ることができたが、南海トラフの地震の危険さを改めて知れたので、防災グッズなど用意するなど、自分のできることをしていこうと思った。また、廃校水族館では、跳び箱やプールなどを利用して水槽にしている、校舎全体を有効活用している、廃校舎をこのように使っているのは初めて見て驚いた。

（社会福祉学部3年・村上桃菜）

参加学生の声②

私は、新型コロナウイルスとチャットGPTの課題などについて学ぶことができた。新型コロナウイルスについては、5類に移行された後の生活について自分の意見や考えを表現しながら、他の参加者、先生の意見や考えを聞き、取り入れ、学びを深めることができた。

新型コロナウイルスの基本的な対策は、手洗いうがい、マスクの着用、室内の換気だと考える。これらを土台とし、さらにワクチン接種やソーシャルディスタンスの確保、3密（密閉、密集、密接）の回避な

どがある。ワクチン接種は個人の判断で接種できるようになったが引き続き感染対策の一つとしてインフルエンザ予防接種と同じように機会があれば接種しておくべきだと考える。

チャットGPTについては、ユーザーが指定した内容についてAIが自動で文章を瞬時に書いてくれるという機能は便利であるが、その文章の根拠については色々なサイトや論文などを参照しているため、正確には分からず、良く調べずに、信用するのは良くないといった意見やAIの怖さについても改めて学ぶことができた。国が示しているチャットGPTの運用方法を参考に使用していけば大いに活用できるのではないかと感じた。

その他には、大学祭で野外力検定の中から三つを選び、参加者に体験してもらおうという活動を行った。子どもから大人まで、さまざまな人に体験してもらった。準備は大変だったが、参加者全員で取り組み、当日は滞りなく安全に楽しく実施することができた。たくさんの人でにぎわった。充実した時間を過ごすことができた。特に子どもたちの笑顔がとても印象に残った。また、災害時に絶対にやってはいけない行動について書籍を使って学んだ。机の下などに隠れることは状況によっては逃げ遅れることにつながることもあり、今までの学生生活での避難訓練で行っていたことが必ずしも命を守ることに繋がらないこと（ただし、被災状況次第であるため命を守る行動であることは間違いない）など防災に関する知識をアップデートすることができた。

この活動を通して学んだことを卒業後自身の生活に活かすとともに、いざという時に大切な人を守ることができるようこれからも勉強や、自らの直接体験での学びを大切にしていきたい。

(社会福祉学部4年・岡崎英幸)



参加学生の声③

私は一年間の活動を通して、連携して動くことと知識・技術を習得しておくことが重要だと感じた。カヌー体験では、漕ぎ方や落水した時の対応方法を学び、愛媛県でのボランティア活動ではボーイスカウトの方々と関わり、体験を通じた学習をした。それぞれの体験の中で問題解決に向けて仲間同士での連携の大切さの再確認と自分自身が問題に対する対処法を知っておくことを学んだ。何らかの非常事態に遭遇した時に対処法を知っているのと知らないのでは大きな差が生まれるからだ。



カヌー体験での二人乗りのカヤックでは、どのように漕げば速く、まっすぐ進むかという協力方法、一人乗りカヌーでは落水した時の戻り方や、立ち漕ぎ時のバランスのとり方、小回りの方法など連携することと、一人での対処法の二つを学んだ。特に一人乗りカヌーでの体験は、パニックに陥った時の自分の命を守るものもあり、知識として頭の中にあってもパニックに陥った時冷静に対処することが難しいため、先に体験することで落ち着くことができ

るというメリットがあると私は考えた。

さらに自らの体験を説明し、周りに対して説明することもでき、自らの命以外に周りの命も助けることができるからだ。ボランティアでは、参加者に体験内容を説明し楽しく体験してもらうための補助や会場の設営などチームで連携して動くことがメインだった。一人で動くとき時間や労力がかかり、効率的に業務をこなすことができないが、チームで協力して動くことでそれぞれの持ち味を生かして動くことができ、一人で動くより何倍も効率的に動くことができる。

このことから、私は仲間同士での連携と、個人としての知識・技能の習得が重要だと感じた。知識だけたくさん持っていたても実際の行動に移すことは難しいこと、また、当然知らなければ動くことができないのではないだろうか。

このマグノリアカフェは、キャンプや野外での活動に重きを置いている。実践を通じた技術や知識の習得は理にかなっていると考える。

普段の生活ではあまり関わることのないボーイスカウトの方たちと一緒に活動や、小学校以来のカヌー体験などは、ただ楽しむだけの活動ではなく、自分にとっての成長に生かせる学びができ、将来に生かせる活動ができたことは間違いない。この1年、貴重な体験であった。(文学部2年・江口裕太)



参加学生の声④

私自身、各地で非現実的なほど大規模な地震や災害が起こる中で、まだ私たちはどこか他人事で、自分に

は関係がないと思ってしまっている。今年の初めに起こった能登半島地震では、13年前の東日本大震災以来津波が人々を襲った。

津波は南海トラフの際に香川県でも起こるとされているが、もちろん津波を映像以外で目にしたこともない。いつどんな規模のものが来るのかも予想出来ない災害は、自分たちの命に非常に大きく関わるが、十分に避難グッズを備えられていない、用意するのはまだ先でいいと先延ばしにしている。自分の住んでいる地域周辺の地震、洪水、土砂災害など、過去の災害データや地形をもとに、ここにいる時に注意報や警報が出た場合はここに逃げるというような危険予測や、自分の身だけではなく自力で避難できない人の手助けや気配りを緊急時にこそ焦らず行動できるようにするには、普段の準備を怠ってはいけないと研究会での学びや、日々の体験活動で改めて考えるようになった。(文学部3年・長尾瑞保)

参加学生の声⑤

私は、今までの、清水先生のマグノリアカフェでの活動を通じて、様々なものを得られた。活動の中で友人との仲を深めたり、様々な人との出会いがあったりした。今年度は愛媛県大洲市での活動がこの一年間の中でとても印象に残っている。工作の手順を指導した中で、自分自身の小さな成長を感じられた。昨年指導した時よりも手順の説明を簡単にすることができ、子どもたちが自分で作ったもので楽しそうに遊んでいる姿を見られてとてもうれしかった。さらに一緒に活動することで、参加者や他の指導員、様々な方との関係を深められたと思う。

高知県室戸市のジオパークでは、室戸の地形の特徴や地震のメカニズムを学ぶことができ、また、自然とのふれあいが多くあった。そのような活動で、普段の生活ではできないような経験をすることができた。

(社会福祉学部3年・川寄紳司)

インプロを生きる。

担当教員：仙石 桂子

わたしたちの活動

インプロ（即興演劇のこと。以下、インプロと言う。）の理論家であるキース・ジョンストンは、インプロの理論家になる前は劇作家であった。インプロのゲームなどは、小難しい、調和できないアーティストたちをまとめるために 始めたものである。私自身、20年ほどインプロを学び、ワークショップやショーを行ってきた。ただ、昨今の自己啓発的になりがちなインプロを見ていると、いつまでも自分の中にインプロへの好意的な気持ちだけにはなれないものがある。ただし、インプロの中のストーリーテリング、そして台本を創る際にもインプロの理論はとても有効的である。

また、筆者が台本の芝居をするメンバーはほとんどがインプロをやっているメンバーである。その際に、インプロをしているからこそその台本芝居の中での俳優としての能力の向上につながり、様々な役ができるようになるのではないかと考えており、稽古中や本番中に何があっても適応でき、本人主体で芝居を創ることができることができていると感じている。

ここで筆者の専門のインプロの説明を行う。絹川（2002）は、インプロの定義を「インプロとは、既成概念にとらわれなくて、その場の状況・相手にすばやく柔軟に反応し、今の瞬間を生き活きと生きながら、仲間と共通のストーリーをつくっていく能力のこと」と述べている。また、ヴァイオラ・スポーリン（2005）はインプロについて「誰でも演じることができ、即興演劇は、（才能ある生徒）と同様に（平均的な生徒）にも教えることができる、直感的知識に到達するための手段である」と述べている。つまり、「インプロ」とはその場の状況・相

手にすばやく柔軟に反応し、仲間と共通のストーリーが作れるようになることであり、直観的知識に到達するための手段であると言える。

インプロの2大理論家

日本のインプロヴァイザーに参考にされているインプロの2大理論家は、ヴァイオラ・スポーリンとキース・ジョンストンである。

ヴァイオラ・スポーリンはアメリカのシカゴで移民の子供達に「シアタースポーツ」という演劇にゲームの要素を交えたものを教えた。大野（2005）は現在のインプロは、スポーリンが1939年に14歳以下の子ども達と観客の提案からストーリーを作るといふ公演を試みたことが原型と考えられていると述べている。また、スポーリンは、1994年に88歳で亡くなるまで教育および職業演劇、初中等教育、天才児教育、英語、宗教、精神衛生、心理学のカリキュラム研究、非行少年更正施設など、幅広い分野でワークショップやデモンストレーションを行っていた

（大野 2005）。スポーリンの演劇には、「フォーカス」という目的があり、ワークショップリーダー（ワークショップを行う人）には、100近くの注意点や助言や、言うべき台詞がしっかり定められている。ここで言っている「フォーカス」とは、舞台のリアリティのなかの特定の人物、物体、出来事に注意を向けて集中することである。

キース・ジョンストンは、インプロの演出家であり、教師である。キース・ジョンストンは、Royal Court Theatreで脚本家集団の運営者、教育事業の責任者、The Royal Court Theatre Studioの演出家などを務めた。キースのインプロの基本的な考え方は、高尾（2004）によれば、「子供には創造性がなく大

人になるにつれて創造性が与えられていくのではなく、子どもは創造性を持っているが大人になるにつれてそれが発揮できなくなる」というものである。また、問題を解決する方法として、キース・ジョンストンは「普通にやる (be average)、頑張らない (not trying)、つまらなくやる (be boring)、独創的にならない (being original)」などの方法論を示している。また、キース・ジョンストンの教え方には、前もってシラバスをつくらない、クラスの前に何をするのか決めない、そこにいる人達を見てこの集団に今何が起きているかを知りそして教えるなどがある (高尾 2004)。

上記のことから、「フォーカス」という目的があり、100近くの詳細点や助言や、言うべき台詞がしっかり定められているヴァイオラ・スポーリンのインプロと、その時になってやることを決定するキース・ジョンストンのインプロでは教え方が異なっていることがわかる。

活動報告

マグノリア・カフェ『インプロをいきる』の活動は、春学期・秋学期は月曜・木曜の19時～20時30分、その時ごとに、丸亀市のにじいろカフェ (丸亀市の行う認知症カフェ) に出演するメンバー、イベントに招待されて出演するメンバーなど、全体でインプロの理論を学び、その後、ストーリーの作り方を学び、ショーイングとしてどう見せるかの練習を行った。

アイスブレイクでは全体や、2人から3人組に分かれて連想ゲームを行い、その後、2人から3人組でインプロにおけるCROWを考える。CROWとは、インプロのストーリーを作る上の基本であり、プラットフォームの部分で、「C」はキャラクター・登場人物 (character)、「R」は関係性 (relationship) 登場人物同士がどのような関係かということ、「O」

は目的 (objective) 登場人物が何をしていて、これから何をしようとしているかということ、「W」は場所 (Where)、ここがどのような場所であるかということ、という4点を表す要素の頭文字である。このCROWがインプロのシーンを作る上でしっかり決まっていると、そのシーンは成功する確率が高いと言われている。高尾 (2012) は、プラットフォームについて以下のように述べている。

「プラットフォームではゆっくりと時間を使います。何も起きなくても、お客さんは不満を感じることなく見ています。舞台上になると、とたんに何か言わなきゃ、何かしなきゃと焦ってしまいますが、急いで何かを言ったりしたりする必要はありません。舞台上は客席よりも時間が速く流れていますので焦ってしまいがちです。しかし、もし冒頭の部分で焦っているいろんなことを言ったりやったりしてしまうと、安定したところがありません。」

CROWのあとにTILTという物語の「傾き」も決めてシーンを作成することにした。この際、高尾 (2012) はTILTについて以下のように述べている。

「美術が色の芸術で、音楽が音の芸術だとすると、演劇は関係の芸術といえると思います。人は関係が変わるのを見るために演劇を観るものだともいえます。(中略) プラットフォームでは、お客さんはゆっくりと見てくれています。そして、見ながらそろそろ何か起きるだろうと思っています。そして何か起こるか予測をしています。演劇は安定と変化からできています。ゆっくり丁寧に安定をつくったら、ここで何か変化を起こす必要があります。そして、変化が終わるとまたそこで安定して、しばらくしてからまた変化して、というふうにしてドラマは進んでいきます。安定したのをしばらく見て、それが変化をするのを見るのが、私たちはものすごく好きです。だから、人はドラマを二時間も三時間も観ることができます。」

インプロのストーリーの作り方の基本である、CROWとTILTを徐々にストーリーの中に入れていき、最後に終わりを見つけることを基本的な練習の構造にした。毎回ペアを変え、様々な人と学年を越えてシーンをする。相手を陥れたり、相手に怒ったり、相手の言葉に反応して泣いたり笑ったりしながら、相手の動き、セリフを見て、「いまここ」に何が必要で、どんな風にこの相手と遊べるのか、を模索してく。そして、シーンが終わったあとには必ず二人で振り返る。自分の「つもり」と相手の「つもり」の違い、そして、こういうことがあったらもっと興味深くなったかもしれない、など、シーンを行った後の対話こそ、インプロの醍醐味とも言える。

今までの高校演劇の中で、「即興」に苦手意識をもつ学生はとても多い。それがどうしてなのかと言えば、ただ即興で芝居をしろ、ということほど怖いことはない。そこで、このCROW、TILTを学ぶ必要性は、みんながストーリーを作る上での共通認識があることによる安定と、「自由すぎないことの自由」を体験できると考えられる。インプロのシーンを作る中の「自由すぎることの不自由」について、高尾(2012)は以下のように述べている。

オスカー・ワイルド(注1)は「自由は創造性の敵」と言っていたそうです。自由になんでもやっていいとなると、逆に何をやっていいかわからなくなって不自由になる。でも、ある制約が与えられると、その中で何ができるだろうと、かえっていろんな発想が浮かんできたりする。その意味ではインプロのゲームは創造のための制約です。

※以下の写真は、丸亀市「にじいろカフェ」、東温市での祭り、善通寺観光交流センターでのインプロワークショップ、インプロショーの様子である。



考察

今年度のマグノリア・カフェは、久しぶりに善通寺市の観光交流センターで上演ができた。そして、いつもの「にじいろカフェ」「東温市の祭りでのインプロショー」というイベントもあり、学生たちは、その場その場でインプロと共に、「生きて」いた。その中で深く感じたことは、「振り返りの重要性」と「プログラムをその場で決めること」であった。

振り返りに関しては、毎回の稽古、ショーイングの中で、学生本人が、「本人自身の問題」ではなく、「相手とどのように演じるか」にシフトする瞬間

間が少し見えた。「本人自身の問題」だけにフォーカスしてしまうと、どのように相手と芝居をするのかに集中していないことが多い。振り返りで「自分が悪かった」「できていましたか？」と聞かせてしまうこと自体がその場の環境づくりの課題でもあるのかもしれないとも考えている。

また、「プログラムをその場で決めること」に関しては、「にじいろカフェ」にいつも来る人が入院したり、今日は演劇の気分でない場合に、演劇的な遊びや、インプロのゲームを行うことで、全員がその場において、やってもやらなくても、途中から入ってもよい場にするにつなげた。そしてこのことが、「居場所づくり」の可能性を感じた。

学生からの言葉

東温市でインプロショーに参加した感想として、普段演劇に関わっていない人でも祭りの中の企画として純粋に演劇を見てくれているということを感じた。普段の公演は観にいきたいと思っている人が来るが、祭りを楽しみにしている人のメインコンテンツとしてではなく、1つの企画のなかでなんとなく見ているもので少しでも楽しそうにしてくれていると、演劇に興味を持って貰えているのかな、と前向きな感情を覚えた。あのような形態は演劇をしていない人たちにも演劇を楽しんでもらうために、とても合理的な手段であると考えた。

(社会学部 2 年・池内怜士)

最初は私が一番年下というのもあり緊張していたが、先生やたんぼぼの皆さんが親しい雰囲気ですり取りをしてくださったことで緊張もすぐに解け、あまり面識のない学生が来たことでより楽しもうと思えた。

WS では少しずつ段階を踏んでやりとりが増えていき、少しずつ話せる人が増えていった。ほとんどの内容で全員が見える形で行われていたため、直接的な

関わりが無くとも一緒に何かをしたという感覚がみんなとの距離をより縮めやすくしてくれた。回数を重ねていく中で「何をしても大丈夫」という気持ちが少しずつ感じられ、普通に話すよりも気楽に関わることができた。抱えているものはみんな違うけど、和やかな雰囲気の中みんな楽しい気持ちを作り共有できれば一気に親しくなれるのだと感じた。

(社会福祉学部 3 年・古賀美優香)

私は今回讃岐広島や岡田コミュニティセンターで開催されるにじいろカフェに参加しました。にじいろカフェに参加して常々感じることは、認知症だからといって出来ない事はないということです。私はいつも参加する前どうしたら場を盛り上げられるか、参加者の方が話しやすい様な空間づくりができるか、話を引き出すにはどうすればいいかななどを考えます。しかし、いつも持ってきた案がいらぬぐらい、参加者の方が話して下さり私が学ばせて頂いています。さらに、ワークショップが終わる頃には私が元気をもたらしていることの方が多いです。毎回新しい出会いや気づきがあるのでとても楽しみです。

(社会福祉学部 3 年・堤晴香)

注

1. アイルランドの作家、詩人、劇作家。代表作に『サロメ』『幸福な王子』など。

参考文献

- ・ Johnstone, Keith, 1979, *Improv: Improvisation and the Theatre* (三輪えり花訳, 2012, 『インプロ 自由自在な行動表現』 而立書房.)
- ・ Spolin, Viola, 1963, *Improvisation for the Theater* (大野あきひこ訳, 2005, 『即興術 シアターゲームによる俳優トレーニング』 未来社.)
- ・ 高尾隆・中原淳, 2012, 『インプロする組織』 三省堂.
- ・ 高尾隆, 2006, 『インプロ教育: インプロは創造性を育てるのか?』 フィルムアート社.
- ・ 絹川友梨, 2002, 『インプロ・ゲーム』 晩成書房.
- ・ Lobman, Carrie and Matthew Lundquist, 2007, *Unscripted Learning: Using Improv Activities Across the K-8 Curriculum* (ジャパン・オールスターズ訳, 2016, 『インプロをすべての教室へ』 新曜社.)

付録① マグノリア・カフェ ストール (大学祭) & フォーラム (報告会)

文責：ネルソン橋本 ジョシュア諒

四国学院大学版シンポジウムを目指して

マグノリア・カフェは四国学院大学版シンポジウム (=饗宴の場) とも呼ばれている。なぜなら、本学キャンパスで「食事を交えての知のコミュニケーション」を重視しているからだ。教員と学生が協力して知的作業に取り組み、時には飲食をともにして知の対話を深めていく。全マグノリア・カフェが参加したストールとフォーラムはこのような「知的共同体」を構築する最適な機会と場を提供している。

昨年の 10 月 14 日に開かれた第 62 回の大学祭では、飲食の販売をはじめ映画上映会や展示発表などが行われた (下記表を参照)。各マグノリア・カフェの参加により大学祭での「知的共同体」の形成に貢献することができた。また 2024 年 1 月 29 日 (月) から 2 月 12 日 (月) までマグノリア・カフェ フォーラムを開催した。アトリウム・コイノスでの展示と映像を使ったオンライン発表が行われた。コイノス・プロダクションとの協力を得て、昼休みの時間を使ってコイノスステージで映像発表も実施された。フォーラムを通して、各マグノリア・カフェの報告・宣伝の場が提供された。

「ストール」の内容と場所について

カフェ名	場所	内容
日韓文化コラボ	514 教室	韓国映画祭
ポストモダン教職カフェ	512 教室	映画上映『夢みる小学校』
科学の芽 (目) を育ててみる会	513 教室	科学実験の演示
“不快適” な学寮の可能性を追う	711 教室	ポスター発表
珈琲・ホビー・ハウス 第 3 章 思想形態と脱構築	721 教室	ゲー専Ⅲそして伝説へ…& ベビーカステラとドリンク
空海カフェ	723 教室	神社や寺院で見られる動物たちの調査発表
隣人と自分の命を守る	724 教室	課外力検定
The Strength of Weak Ties 5.0	野外テント	ドリンク
Yongaku Well-being Network	野外テント	フリーマーケット
踊ろうぜ	野外テント	タコライス
インプロを生きる。	野外テント	タコライス



大学祭のキャンパスマップ



大学祭のキャンパス風景



科学の芽（目）を育ててみる会



日韓文化コラボ



珈琲・ホビー・ハウス 第3章 思想形態と脱構築



空海カフェ



踊ろうぜ&インプロを生きる。



The Strength of Weak Ties 5.0



アトリウム・コイノスでの展示と映像発表（フォーラム）

付録② マグノリア・カフェに関する規程〈一部抜粋〉

20世紀後半から21世紀にかけて静かに、しかし確実に、私たちの社会は分水嶺を通過した。消費社会、ポストモダン、ノンモダン、後期近代、再帰的近代、リスク社会、リキッド・モダニティ、ポスト工業化、情報化、ニューエコノミー、ポスト資本主義、知識社会等、視点によってさまざまな切り口や多少の時期設定の違いはあるものの、近代化の象徴であった重工業と少品種大量生産を中心とする、20世紀の産業社会がこれまでとは異質なものに変容したことは衆目の認めるところだろう。

社会がポスト産業社会へと変貌すると同時に、私たちはこれまでとはまったく異なった諸問題に直面することになった。そのため、これまで妥当性をもっていた学問の理論枠組みや概念装置では、新たに発生した問題を分析したり、解決したりすることができなくなった。つまり、従来の学問・科学は新たな問題に直面して、自らの限界に向きあわざるをえなくなったのだ。学問・科学には今日、根本的な自己変容が迫られている。

本学のリベラル・アーツ教育は、キリスト教主義を基盤に据えながら社会をより善いものに変革し、「自分と他者たちの希望と幸せ」を見いだすことのできる、見識ある人間の育成を目標としている。大学では、新たな形で展開されるべきアクチュアルな問いが寄せられ、ラディカルな知的営為が機軸に据えられなくてはならない。

マグノリア・カフェは、課外活動として正規カリキュラムを補強しながら、現代社会に「問いを発見」して「適切な問い方」(問題構制=パラダイム)を模索する時空を、本学キャンパスに実現しようとする試みである。また、この試みには、西欧発の伝統的手法を採用する。食事を交えての知のコミュニケーション、すなわち会食仲間の形成だ。かつて、古代ギリシ

ャでは、パーティで飲食をともにして知の対話がなされた。シンポジウム=饗宴の場である。マグノリア・カフェは、四国学院大学版シンポジウムである。

目的

本学の課外活動としてマグノリア・カフェを全学的プログラムとして展開する。その目的は、次の通りである。

- 1) 現代社会を単に自明性のもとに捉えることを越えて、私たちの社会的現実に関々の問いを発見する。
- 2) 教員と学生による内発的動機による知的作業を促進する。
- 3) 学問をシンポジウム=饗宴として行う機会、すなわち飲食の場を含む知的作業を通して、包括的かつ知的共同体構築の可能性を探る。
- 4) マグノリア学寮でのアカデミック活動の一環として、同学寮の理念である Living Learning Commune の構築に貢献する。

カフェ・カテゴリー

マグノリア・カフェは、以下の3カテゴリーで展開する。

- 1) A
 - i. テーマは、明確に近代社会あるいは現代社会への批判的視点を含む。
 - ii. 1人の専任教員あるいは特例教員Bが、本学正規学生(最低5名)と共に実施する。
 - iii. 「マグノリア・カフェ ストール」を、大学祭で1回、そして、「マグノリア・カフェ フォーラム」を、年度末に開催する。

2) B

- i. テーマは、実存的あるいは社会的問いを含む。
- ii. 一人以上の専任教員あるいは特例教員 B が、本学正規学生（最低 3 名）と共に実施する。
- iii. 「マグノリア・カフェ ストール」を、大学祭で 1 回、そして、「マグノリア・カフェ フォーラム」を、年度末に開催する。

3) 共同教育研究

- i. 同年度の 2 つ以上のマグノリア・カフェによる合同特別プログラム教育研究として実施する。
- ii. 「マグノリア・カフェ ストール」を、大学祭で 1 回、又は、「マグノリア・カフェ フォーラム」を、年度末に開催する。

表紙と裏表紙：

Attributed to Lydos. *Terracotta column-krater (bowl for mixing wine and water)*. Terracotta; black-figure. ca 550 BCE. Metropolitan Museum of Art. Public Domain.

URL: <https://www.metmuseum.org/art/collection/search/253349> (2024年2月15日取得)

Public Domain の画像に加工を入れています。

マグノリア・カフェ 年間レポート「MARE」 第3集
Magnolia Cafe Annual Report Vol. 3

2024年3月発行

発行所 四国学院大学
〒765-8505
香川県善通寺市文京町 3-2-1
TEL 0877-62-2111

編集 マグノリア・カフェ運営委員会
発行責任者 ネルソン橋本ジョシュア 諒

印刷・製本 株式会社 美巧社
〒760-0063
香川県高松市多賀町 1-8-10
TEL (087) 833-5811



VOS ESTIS SAL TERRAE



SHIKOKU GAKUIN
UNIVERSITY

FOUNDED IN
1949

MARE vol. 3